新潟県埋蔵文化財調査報告書第14

国道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

五分一稲場遺跡

1978

新潟県教育委員会

国道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

五分一稲場遺跡

1978

新潟県教育委員会

序

本書は，国道116号線歩道建設工事に伴い，昭和52年度に新潟県教育委員会が調査主体となって発掘調査を実施した，三島郡寺泊町五分一稲場遺跡の発掘調査記録である。

本遺跡の調査では，古墳時代前期から中期にかけての遺構と遺物が主として検出され，今日まで断片的にしか把握されなかった古墳時代の文化の様相が一層明らかになった。

近年，各地で種々の遺跡の発掘調査がなされているが，本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸である。

なお，本調査に参加された調査員はもとより，多大の御協力・御援助を賜わった寺泊町教育委員会，計画から調査実施に至るまで格別の御配慮を賜わった建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所の各位に対し，ここに深甚なる謝意を表する次第である。

昭和53年3月

新潟県教育委員会

教育長　米　山　市　郎

例　　言

1.　本報告書は新潟県三島郡寺泊町大字五分一地内に所在する五分一稲場遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は国道116号線歩道建設に伴い，新潟県が昭和52年度に建設省北陸地方建設局から受託をして実施したものである。

2.　本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり，昭和52年5月16日から5月21日まで実施したものである。

3.　遺物の整理・復元作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財班の職員があたった。

4.　遺構・遺物の実測，写真撮影及び挿図などの作成は戸根与八郎・千葉英一・家田順一郎があたった。

5.　本報告書の刊行にあたり，寺泊町教育委員会の御好意により，採集資料を借用し第Ⅳ章の出土遺物の一部に掲載した。

6.　発掘調査における出土遺物は一括して県教育委員会が保存・管理している。

7.　本報告書の執筆は発掘担当者を中心にして調査員が協議のうえ，分担執筆をしたもので文末に執筆者の氏名を明記した。

8.　発掘調査にあたり，参加者各位ならびに寺泊町の温かい御支援と御協力を賜わった。また，建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所から種々の御配慮を賜わったことを記して感謝の意を表する次第である。

9.　発掘調査から本書の作成に至るまで下記の諸氏から種々の御指導と助言を賜わった。（敬称略）

岡本郁栄，関　雅之，寺村光晴，本間信昭

目　　次

Ⅰ　序　　説……1
　1.　発掘調査に至る経過
　2.　発掘調査の経過
Ⅱ　遺　　跡……4
　1.　遺跡の立地と環境
　2.　周辺の遺跡
　3.　土層堆積と遺物の出土状況
Ⅲ　遺　　構……8
　1.　ピ　ッ　ト
　2.　溝状遺構
　3.　墳　　墓
　4.　炭焼窯跡
Ⅳ　遺　　物……10
　1.　石　　器
　2.　土　　器
　　(1)　縄文土器
　　(2)　須　恵　器
　　(3)　土　師　器
Ⅴ　総　　括……24
　1.　土器について
　　(1)　須恵器の型式と編年
　　(2)　土師器の型式と編年
　2.　ま　と　め

図　版　目　次

図版第１図　五分一稲場遺跡の遠景（西側から），五分一稲場遺跡の近景（南側から）

図版第２図　１～５区遺構群（西側から），１～２区遺構群（西側から）

図版第３図　３号溝土器出土状態（西側から），３号溝土器出土状態（南側から）

図版第４図　１～２区遺構群（北側から）

図版第５図　墳墓（西側から），発掘風景

図版第６図　遺物出土状態（1．縄文土器（深鉢），2．土師器（坏），3．土師器（高坏脚部），4．須恵器（瑞），5．土師器（甕））

図版第７図　出土遺物（縄文土器）

図版第８図　出土遺物（須恵器）

図版第９図　出土遺物（土師器）

図版第10図　出土遺物（土師器）

挿　図　目　次

第１図　五分一稲場遺跡周辺の地形……3

第２図　周辺の地形と遺跡の分布……5

第３図　五分一稲場遺跡全測図……7

第４図　遺構実測図・土層断面図……折込み

第５図　墳墓実測図……9

第６図　１号炭焼窯跡実測図……9

第７図　２号炭焼窯跡実測図……9

第８図　出土遺物（石器）……10

第９図　出土遺物（縄文土器）……11

第10図　出土遺物（須恵器）……13

第11図　出土遺物（土師器）……15

第12図　出土遺物（土師器）……17

第13図　出土遺物（土師器）……19

第14図　出土遺物（土師器）……21

第15図　出土遺物（土師器）……22

Ⅰ 序　　説

1. 発掘調査に至る経過

国道116号線は柏崎市から国鉄越後線に沿って西山丘陵の向斜谷を通って新信濃川を渡り，西蒲原郡の弥彦山麓を経て新潟市に至る延長76.1㎞の海岸沿いに走る国道である。長岡市を経て新潟市へ至る国道8号線に比して柏崎市から新潟市までは時間的にも半減され，最近その利用が盛んで交通量も多い。建設省北陸地方建設局でも人身の安全確保の立場から歩道建設計画を策定し，昭和51年度に寺泊町五分一地内を計画し，工事を実施していた。当初、本遺跡にかかる区間については丸石積みの石垣を除去し，若干拡幅してブロックを積む工法であったが，土質が悪く，大きく切り崩して工事を施行する工法変更を行ない，その工事に着手していた。昭和51年12月21日，岡本郁栄氏（当時県立西越高等校学教諭）が時たま通りかかった際に，遺跡の一部が工事にかかっている事を寺泊町教育委員会に連絡をした。町教育委員会はさっそく現地確認を行ない，12月22日に県教育委員会へ〝国道116号線の歩道工事で五分一稲場遺跡の一部が工事地内に入り，遺物等が出土している由〟の電話が寺泊町教育委員会からあった。県教育委員会は建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所へ連絡をし，工事を一時中断する様申し入れを行った。12月27日，吹雪の中で県教育委員会・町教育委員会・上越国道工事事務所の三者で現地調査を行なった。この結果，工事にかかる遺跡の面積は約55㎡で，良好な古墳時代中期の遺物包含層やピット等が認められた。昭和52年1月8日，本遺跡の取扱いについて建設省北陸地方建設局上越国道工事事務所と県教育委員会で協議をした。その結果，発掘調査は雪どけを待って昭和52年4月～6月までの間に実施することになり，遺跡のかかる箇所については工事を昭和52年度に繰り越す事で了解点に達した。4月13日，調査方法の概要を説明し，作物・立木の処理及び調査実施までの事務打合せを行ない，発掘調査を5月16日～5月21日の6日間で実施する事を決定し，確認を行なった。4月26日，寺泊町教育委員会及び五分一の総代に調査の概要等を説明し，作業員の募集等について協力を依頼した。5月10日，調査区域等の最終的確認を関係諸機関と行なった。5月13日，建設省北陸地方建設局長と県知事君　健男との間で五分一稲場遺跡発掘調査の委託契約の締結が行なわれた。発掘調査は寺泊町教育委員会ならびに地元有志の協力を得て昭和52年5月16日から実施するはこびとなった。　（戸根与八郎）

2. 発掘調査の経過

五分一稲場遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会（教育長　米山一郎）が発掘主体者となり，県教育庁文化行政課埋蔵文化財班の職員を中心に，県内の考古学研究者・地元文化財関係者を調査員に依頼して協力を得た。また，地元の五分一集落の有志の方々には作業員として協力を得て昭和52年５月16日から５月21日までの６日間にわたって実施した。

調査日誌

５月16日　発掘調査用具・器材の輸送を行うとともに寺泊町教育委員会などの文化財関係者に挨拶を行ない，調査の協力を再度依頼する。午後から発掘対象地及びその周辺部の地形測量を行ないグリッドの基本杭を打つ作業を行う。周辺から遺跡の写真撮影を行う。

５月17日　発掘の諸準備が完了したので，調査員・作業員に調査の概要・調査の方法及び庶務的事項の説明を行なった後，実質的発掘作業に着手した。１区の南側及び２・３区に着手し，地表面下60～70cmでピット及び溝状遺構の上面を確認する。遺物は土師器が主体である。

５月18日　１区の北側及び３～５区に着手する。１区では近現代の墳墓及び炭焼窯が，３～５区では３本の溝状遺構とピットの上面が地表面下30～50cmで確認された。４区では土師器に伴出して須恵器の瑞・受坏が出土する。特に３・４区は他の区に比して遺物量が多い。

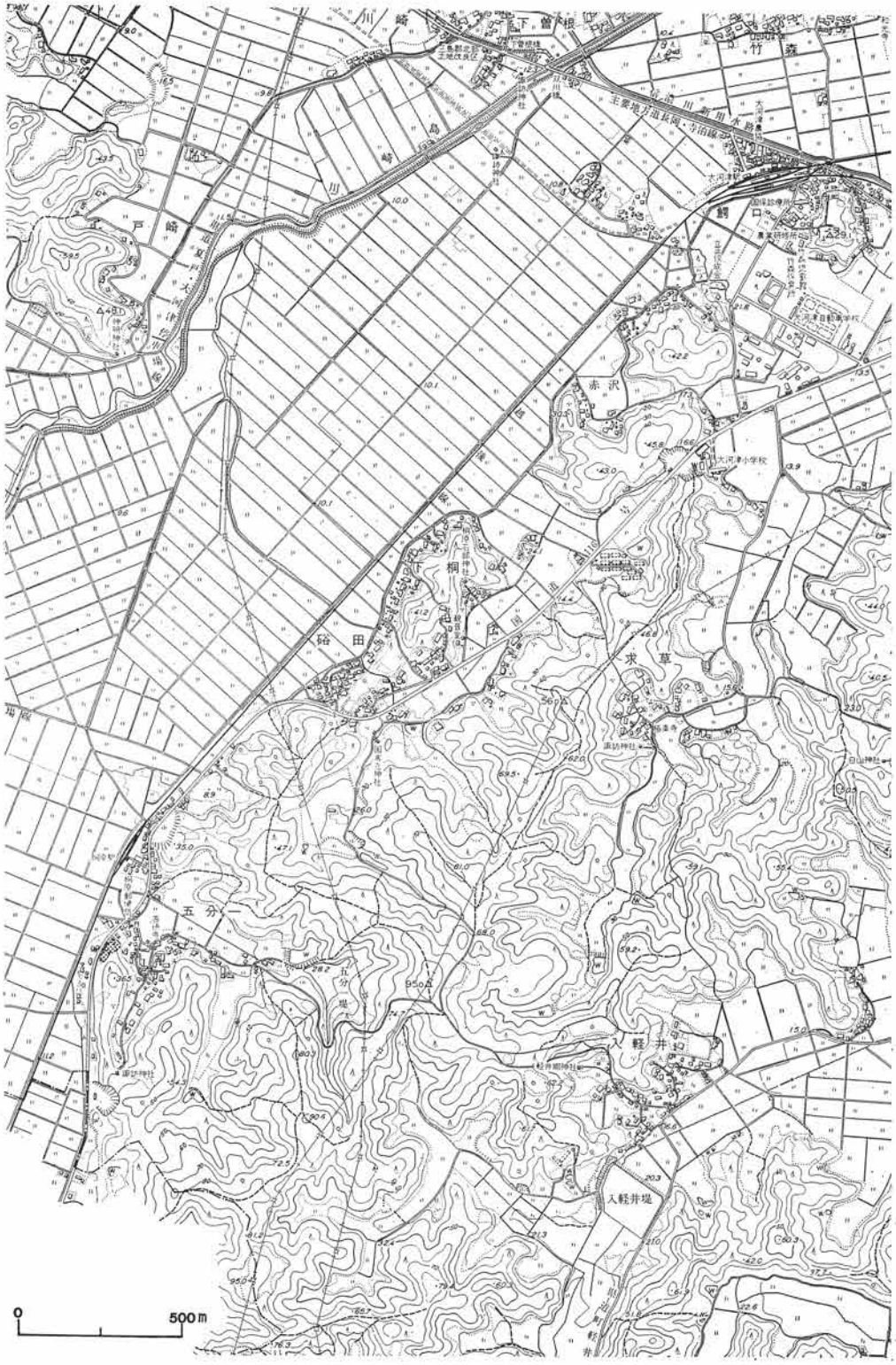
５月19日　各区とも基盤層（黄褐色砂質粘土層）まで掘り下げたので遺構の精査を行う一方，遺構を掘り下げる。溝状遺構及び北側で検出されたピット中から土師器が出土する。

５月20日　遺構の実測及び写真撮影を行う。

５月21日　補足調査を行う一方，関係者・関係機関に挨拶を行った後，器材等の撤収を行ない本遺跡の現地調査は終了した。

なお，発掘調査は下記の人員構成で実施した。　（戸根与八郎）

調査担当者	戸根与八郎	（県教育庁文化行政課学芸員）
調　査　員	千葉　英一	（県教育庁文化行政課学芸員）
	家田順一郎	（県教育庁文化行政課託嘱）
	山崎　弥作	（県文化財保護指導委員）
	斉藤　一郎	（寺泊町文化財調査審議委員）
作　業　員	寺泊町五分一集落の有志	
協　力　員	寺泊町教育委員会	
	株式会社　伊藤組	
事　務　局	湯本　　武	（県教育庁文化行政課副参事）
	森田　長治	（県教育庁文化行政課主事）



第１図　五分一稲場遺跡周辺の地形（寺泊町提供）

Ⅱ 遺　　跡

1. 遺跡の立地と環境

島崎川の両岸は丘陵性の山地で，丘陵の連なりは北北東～南南西の方向を示し，基本的には二本の背斜構造で構成されている。この構造は石油構造ともいわれ，日本石油界の発祥の地である出雲崎町尼瀬油田，かつては日本有数の生産量を誇った西山油田もこの近辺に存在している。島崎川の西側は標高80～90mの低い丘陵で西山丘陵と呼称され，北は国上山・弥彦山・角田山へと続いている。本丘陵の東側は構造線と直交するように多くの谷が形成されている。また，この丘陵は急崖をもって日本海に接し，その崖下を旧北国街道が通っている。島崎川の東側の丘陵は信越国境の鍋倉山・天水山等の東頸城丘陵に源を発する曽地丘陵で，高度を徐々に下降して，北端の大河津付近で新潟平野に接している。この両丘陵の間をぬうようにして出雲崎町田中に源を発し，寺泊町小豆曽根に至る延長18.3kmの島崎川が新信濃川に注いでいる。この河川はかつては西川に合流しており，特に夏戸から鰐口・竹森に至る下流地域は常に湛水に悩まされ，江戸時代までは西山丘陵との間に円浄寺潟が広がり，潟湖を形成していた。現在も小豆曽根などに潟端の地名を残している。

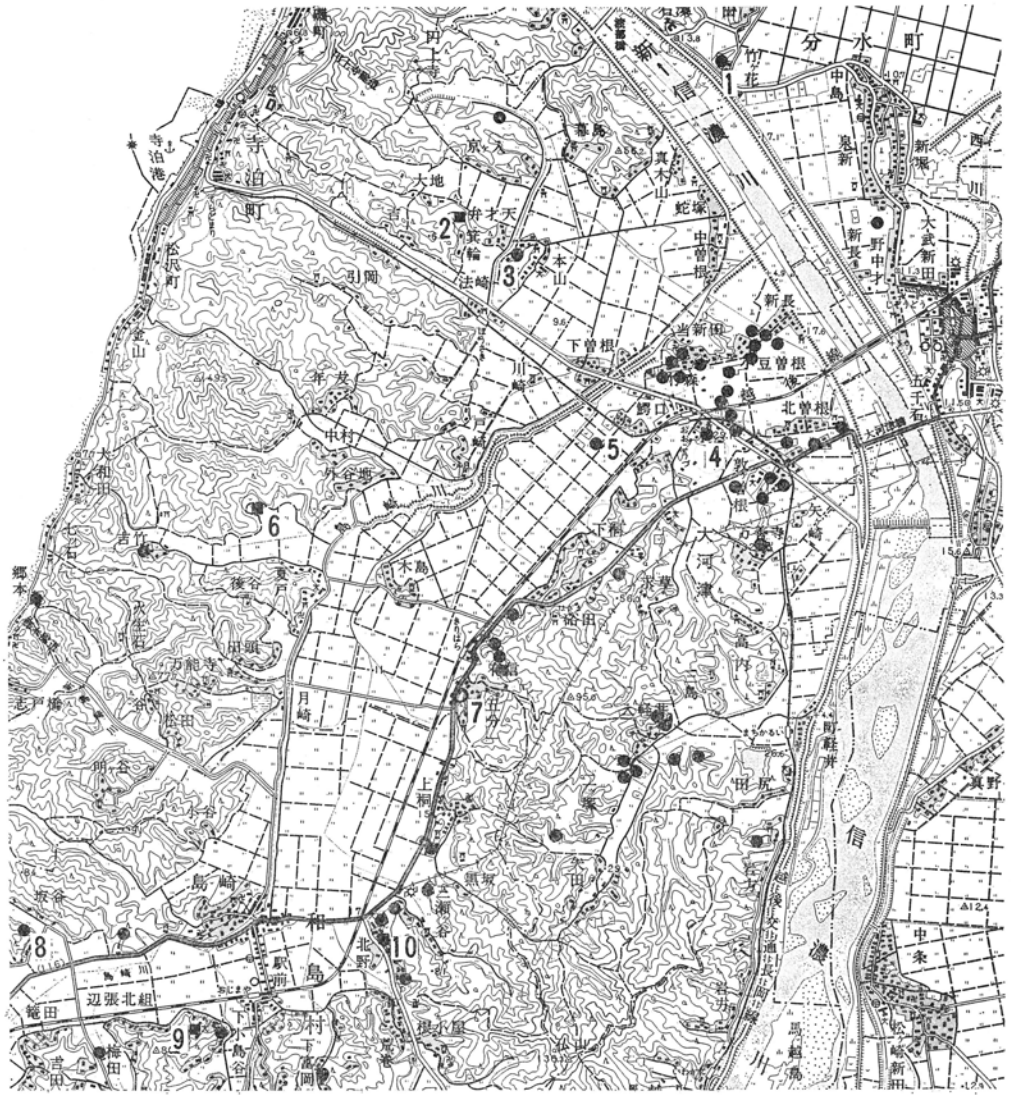
本遺跡は曽地丘陵の西麓，曽地丘陵の一支陵が徐々に高度をおろして南から北へのびる低丘陵の北端，西側平坦面にあって，標高20m，水田面との比高約10mをはかる位置に存在している。北側及び東側は沢によって画され，西側は国道116号線を介して崖となり，島崎川の沖積地を臨んでいる（第1図・第2図，図版第1図）。遺跡の地籍は三島郡寺泊町大字五分一字稲場313～325，小字小屋敷530～604で，現状は畑地及び宅地になっている。なお，今回の発掘調査地点は小字稲場325の一部分である。

（戸根与八郎）

2. 周辺の遺跡

第2図は五分一稲場遺跡の周辺で弥生土器・土師器・須恵器の遺物包含地及び窯跡の分布図で，総計60遺跡を示したものである。この他に島崎川流域の沖積部や海岸砂丘の砂層に埋没しているものが数多く存在しているものと推定される。ここで図示した遺跡は生産遺跡を除いて，縄文時代の遺跡と複合しているものが大部分を占めている。なお，土師器・須恵器の遺物包含地についての時代差・時期差については発掘調査等が行なわれていないため，正確な年代を把握することはできないことを最初に述べておきたい。窯跡は須恵窯である。

本地域の遺跡の分布は島崎川の右岸に多く散在し，その立地は大略2つに大別される。遺跡が特に集中している竹森・小豆曽根周辺では遺跡と遺跡の距離が非常に近接し，標高10.4m前



第2図　周辺の地形と遺跡の分布（国土地理院発行「三条」1:50,000原図）

1.　竹ガ花遺跡　2.　弁才天窯跡　3.　本山舞台島遺跡　4.　横滝山遺跡　5.　古屋敷遺跡
6.　夏戸窯跡　7.　**五分一稲場遺跡**　8.　坂谷遺跡　9.　北辰中学校遺跡　10.　中道遺跡

後の微高地状の底地や自然堤防上に立地している。一方，今回発掘対象となった五分一稲場遺跡が存在する五分一や和島村の北野周辺の遺跡は曽地丘陵の一支陵が徐々に高度をおろし，沖積部に面した丘陵先端部の平坦地や緩斜面に立地している。標高20～40m，水田面との比高10～13mを測るものが多い。1は竹ガ花遺跡（分水町大字国上字竹ガ花），2は弁才天窯跡（寺泊町大字大池字小丸山），3は本山舞台島遺跡[註1]（寺泊町大字本山字舞台島）で，昭和30年橋脚工事の際，水田下約8mで，川底からさらに2m下った地点から矢板様の木器と弥生時代後期の器台・無頸壺や籾痕のついた土器片が出土しいてる。4は横滝山遺跡（寺泊町大字竹森字横滝）で，東西約

150m，南北約200m，比高約10mの丘陵上に立地している。本遺跡については，江戸時代の文化8年，すでに橘　茂世の『北越奇談』の中に「寺泊より東一里，竹森といへる古き砦の跡ありて，角櫓とおぼしき所もっとも高く方なり。……（省略）過ぎし頃土中深く掘穿つに，白玉の勾玉一つ出づ。甚だ常に見るよりは大なり。後其の得たるもの東武に行きて，是を失す。」と記されている。この遺跡は縄文時代から平安期までの重複遺跡で，土器類の他に子持勾玉・軒丸瓦・平瓦・鴟尾・礎石等も確認され[註2]，昭和51年に町教育委員会が発掘調査主体となって発掘調査を実施している[註3]。発掘調査によって，基壇状遺構・住居跡・溝状遺構が検出された。各遺構とも全体は確認されていないが，基壇状遺構は切石列が東西9.8m，南北1.2mの範囲で検出され，切石の状態から羽目石と考えられている。住居跡は壁長約4.2mの方形竪穴住居跡と考えられ，床面上から須恵器の長頸壺・坏・高台付坏が検出されている。溝状遺構は4列検出されているが，その内の1例は幅約2.2m，深さ約1mで断面はV字形を呈している。溝の内部からは炭化物および多量の古式土師器が検出されている。また，碧玉製管玉も検出されており，この溝状遺構の性格を予測せしめるものがある。遺物は瓦類の他に須恵器や縄文土器，弥生土器が出土している。調査の結果，瓦類・切石列等から，今日まで所在未詳であった越後国府・国分寺と越後城の存在を当地に求め，その年代を8～10世紀としている。5は弥生時代終末期の高坏・埦・坏などが出土した古屋敷遺跡（寺泊町大字鰐口字大谷地），6は夏戸窯跡（寺泊町大字年友字中村），8は坂谷遺跡（和島村大字坂谷字西保内），9は瓦を出土した北辰中学校遺跡（和島村大字大島谷），10は中道窯跡（和島村大字北野字中道）である。1・8については弥生時代の遺跡ではあるが，詳細は不明である。

（戸根与八郎）

註1.　寺村光晴・久我　勇『寺泊のおいたち―先史遺跡について―』　寺泊町教育委員会　昭和35年
註2.　註1に同じ
　　岡本郁栄・金子拓男他「西古志の考古学的調査」『寺泊・出雲崎』（新潟県文化財調査年報第16）新潟県教育委員会　昭和52年
註3.　寺村光晴編『横滝山廃寺跡発掘調査概報―昭和51年度調査―』　寺泊町教育委員会　昭和52年

3.　土層堆積と遺物の出土状況

グリッドは発掘対象地域が延長25m，最大幅3.5mの三角状の狭少な地域であったために，5mを1区画として北側から南側へ1・2・3……とし，1区・2区・3区・4区・5区と名称を付した。第4図の土層断面を見ると，基本的には3層に区分される。1層は褐色土の耕作土で，南側より北側が厚く堆積している，特に3区の中程は畑地と宅地の境で，ここから北側のⅠ層下面には厚さ10cm内外でつき固められた黄褐色粘土が敷かれている。これは住宅を建設する際に盛り込んだものであると言われている。宅地と畑地ではⅠ層の土質も若干異なっており，宅地である1・2区では黄褐色粘土のブロックを含んでいる。Ⅱ層はⅠ層より茶色味の強

い褐色土で，３区の中程を境にして北側が薄くなっている。これはⅠ層下面の黄褐色粘土をつき固めた際に圧縮されたものと考えられる。遺物はⅠ層下面よりⅡ層下面にかけて土師器片が若干出土している。Ⅲ層は硬くてしまりのある暗褐色土で，北側で厚さ約25cmをはかるのに対して，南側は15cmと薄くなっている。本土層が遺物包含層で遺物の85パーセントが出土している。しかし，縄文土器・土師器・須恵器が混在して出土し，それぞれ断片的な形で検出されたものが多い。平面的分布では，１～２区は３～５区に比して遺物の相対量が少なく，縄文土器片を，３～５区では土師器が主体で須恵器が検出されている。Ⅳ層は黄褐色や灰白色の漸移層で部分的にしか見られない。第Ⅴ層は基盤層の黄褐色砂質粘土で南から北へ緩く傾斜し，本遺跡の立地する丘陵先端部の等高線のは入り方に規を一にしている。　（戸根与八郎）

第3図　五分一稲場遺跡全測図

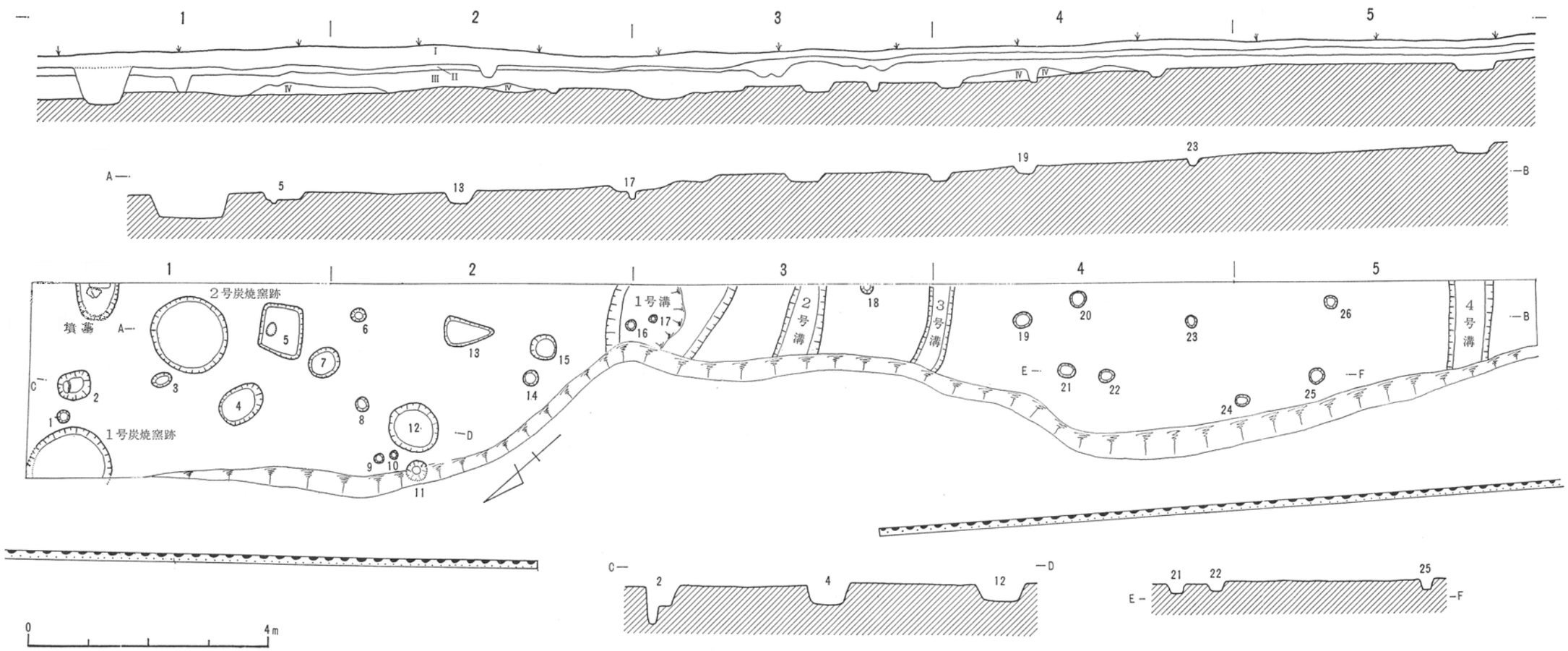
Ⅲ 遺　　構

発掘調査区域内で検出された遺構は26個のピットと4本の溝状遺構である。この他に，近現代のものと考えられる墓拡1基・炭焼窯が2基確認されている。ピット及び溝状遺構の性格等については発掘対象面積が狭少なためピットと溝状遺構が存在していることの事実を除いては明確に把握することはできない。

1. **ピット**（第4図・図版第2図・図版第4図）　検出されたピットは現地表面下40～68cmのⅤ層（黄褐色砂質粘土）の上面で確認されたもので第Ⅲ層（暗褐色土）から掘り込まれたものと考えられる。形態は楕円形を呈するものが主で，大きさは長径24～36cm，短径22～26cmを計るものが多い。また，P_1・P_{10}・P_{11}・P_{14}・P_{22}のように円形を呈するもの，P_5のように方形を呈するもの，P_{13}のように三角形を呈するものもある。ピットの深さはP_2の－59cm・P_{11}の－47cm・P_{15}の－50cmを除いて，大略15～25cm以内におさまるものが多い。形状・規模・深さから，これらのピットの分布を見ると，1・2区のピットが規模及び深さが一定していないのに対して，4・5区のピットは長径16～22cm，短径12～26cm，深さ10～20cm前後を計る楕円形で一つの規則性を見い出す事ができるが，位置関係及び相互関係に規則性がなく建物跡としてはまとまらない。また，溝状遺構との関連も定でない。ピットの内部充満土は黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色土で，P_2～P_5，P_{10}・P_{11}・P_{13}・P_{15}・P_{21}・P_{26}から細片になった土師器の高坏片・甕片が検出されている。P_{16}・P_{17}はこれらのピットとは性格を異にし，1号溝に付随するものであろう。

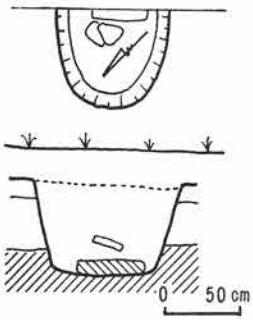
2. **溝状遺構**（第4図・図版第2図・図版第3図）　検出された溝状遺構は現地表面下40～50cmのⅤ層（黄褐色砂質粘土）の上面で確認されたもので，第Ⅲ層の（暗褐色土）から掘り込まれたものと考えられる。4本ともに南東～北西方向に走り，底面のレベルも北西方向に若干傾斜している。2～4号溝の上幅は3号溝が40cmと細いのに対し，2・4号溝は70cmと比較的幅広である。深さは確認面から15～20cmと浅く，断面は緩かな「U」字状を呈し，底面は平坦になっている。2～4号溝の内部充満土は暗褐色土で，底面付近には炭化物が薄く堆積し，各溝から土師器の高坏片・甕片が検出されている。3号溝からは高坏坏部（第11図4）と甕形土器（第14図2）が底面に接して潰れた状態で出土している。1号溝は西側及び東側が詳かでないが，壁面のカーブから西側は北側の壁と南側の壁が接続して土拡状を呈するものと考えられる。断面は緩かなレンズ状で，南側には段が設けられている。内部充満土は暗褐色で，土師器片が集積された如く一坏に詰まっていた。なお，底面にはP_{16}・P_{17}の2本のピットが穿たれている。

3. **墳墓**（第5図・図版第5図）　墓拡は第Ⅱ層（褐色土）から掘り込んだもので，一部を確認したにすぎない。形状は楕円形を呈するものと思われ，短径は上面で94cm，下面で64cm，深さ58cmを計る。内部充満土は暗黒灰色粘土で，底面から上へ30cm位から底面にかけて焼人骨片が検



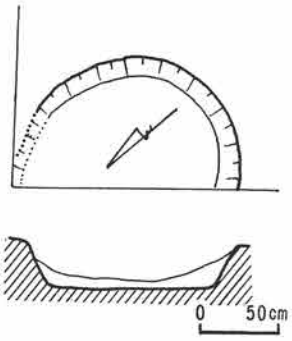
第4図　遺構実測図・土層断面図

出された。底面は平坦で，石棒状の石（内半欠1）が墓拡の短軸に併行して2本検出され，その上に石仏がうつぶして出土したのみで，他の遺物は全く出土しなかった。石仏は頭部を欠失し，全体的に彫の浅い安山岩質の坐像で，現存像高18.5㎝を計る。像全体が磨滅しているために，細部については不明な点も多いが，手は右掌に左掌を置き，その上に宝珠ないしは薬壺がのせられている。なお，聞き込みの結果，本墳墓の存在について知っている人は誰もおらず，旧形状についても不明である。



第5図　墳墓実測図

4. 炭焼窯跡（第6図・第7図）　1号炭焼窯跡は第Ⅱ層から掘り込んで構築されており，形状は直径約1.40ｍ前後を計る円形を呈すものと推定される。壁面は60～70度の角度を有し，硬く焼けている。特に壁面の下部，底面から7～8㎝上部までは硬く焼けている。内部の充満土は暗褐色土で，底面にはレンズ状に粉炭及び木炭片が6～12㎝の厚さで推積している。



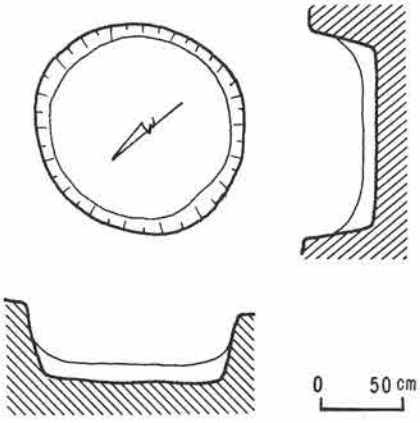
第6図　1号炭焼窯跡実測図

2号炭焼窯跡は1号炭焼窯跡と同様，第Ⅱ層から掘り込んで構築されている。形状は円形を呈し，上面での長径1.32ｍ，短径1.24ｍ，下面での長径・短径1.08ｍ，壁面は約70度の角度を有している。壁面および底面は1～2㎝の厚さで硬く焼けており，特に底面及び壁面の下部は硬く焼けている。内部の充満土は暗褐色土で，底面には粉炭及び木炭片が10㎝内外の厚さでレンズ状に堆積している。

検出された2基の窯跡の周辺部及び内部からは年代を推定し得る資料は1点も検出されなかった。

この種の炭焼窯は地元ではカジコ焼と呼称され，昭和24・25年度まで農閑期に自家用のボイ炭を焼いたものであると言われている。県教育委員会は昭和51年に刈羽郡刈羽村地内で発掘調査を実施した際にもこの種の炭焼窯が確認され，報告されている[註1]ので参照されたい。

（戸根与八郎）



第7図　2号炭焼窯跡実測図

註1.　戸根与八郎・家田順一郎他　「北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書」（『新潟県埋蔵文化財調査報告書第9』）　新潟県教育委員会　昭和52年

Ⅳ 遺　　物

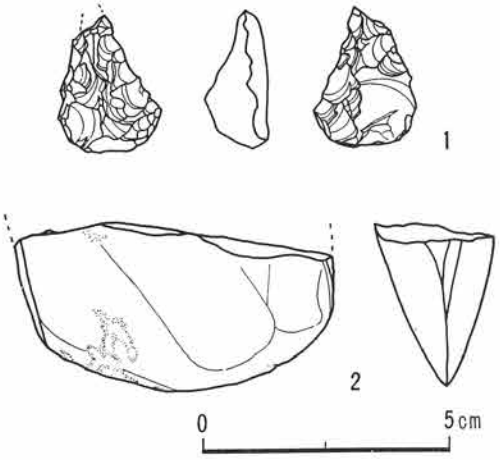
本遺跡から出土した遺物には，縄文土器・土師器・須恵器などの土器および石器がある。このうち量的に最も多いのは土師器であり，全体の約99%を占めている。これらのほかに，調査区域の北東隅で検出された近世の墳墓からは石仏１体と焼人骨が出土している。

1. 石　　器（第８図）

出土した石器は図示した２点だけで，このほかに最大長１*cm*未満の石屑（チップ）が３点出土している。

１は瑪瑙の剝片を素材とした石錐で，尖端部が欠損している。基部は調整剝離が粗く，かなり部厚くなっている。2.79×2.07×1.18*cm*。５区Ⅲ層出土。

２は磨製石斧の刃部で，刃先にはかなりの損耗が認められる。石材は輝石安山岩である。3.66×6.46×2.41*cm*。４区Ⅲ層出土。　　（千葉英一）



第８図　出土遺物（石器）

2. 土　　器

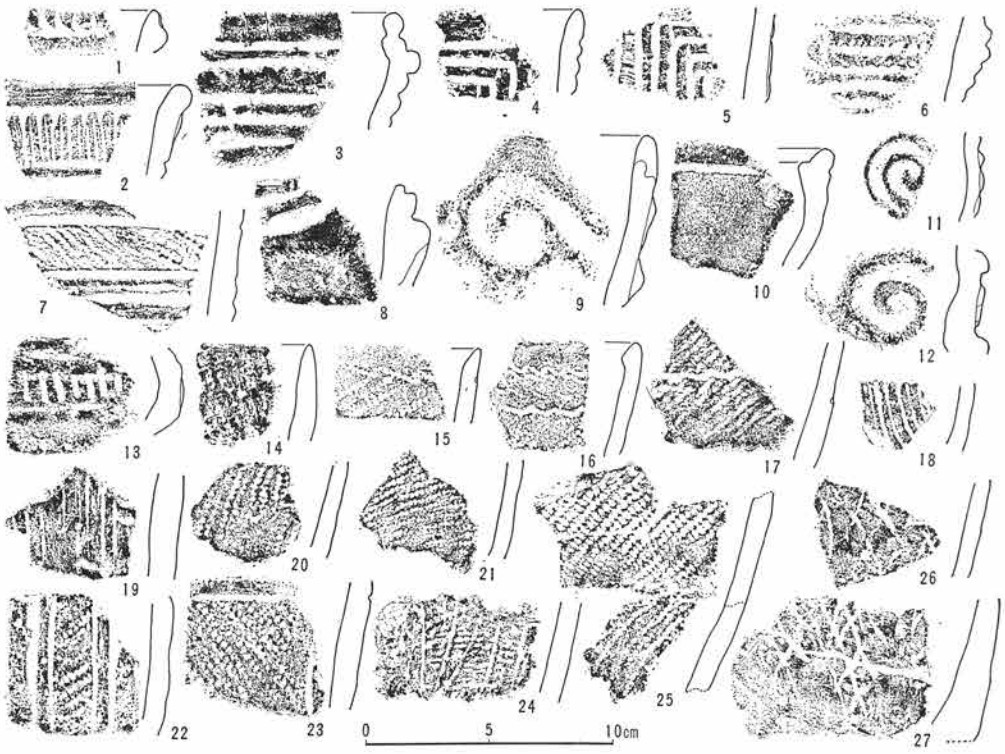
(1) 縄文土器（第９図，図版第７図）

縄文土器はいずれも破片で，その出土状況も層位的ではなく，土師器・須恵器と混在していた。その数は発掘調査前の採集資料を含めて35片である。これらの破片から窺える器形は，10の浅鉢形土器のほかはすべて深鉢形土器と考えられる。

１は口唇部に半截竹管による爪形文が施されており，口縁形態は波状を呈すると思われる。２はいわゆる蓮華文と称されているもので，上端に半截竹管を順次押捺して弧を作出し，条線を付したものである。３は半截竹管を横位に引いて半隆起線をめぐらしており，内面には煤が付着している。４・５は同一個体の破片で，胎土には多くの雲母を含んでいる。半截竹管による半隆起線が方形にめぐらされ，その一部には爪形文が縦位に施されている。６は半隆起線の２段に刺突文が施されている。７・22・23は半截竹管による区画内に縄文が施されている。９は波状口縁下に大きな渦巻文があり，８も同様であろう。10は浅鉢形土器で，口縁下に１条の沈線がめぐらされ，内外面ともよく磨かれている。13はいわゆる縁帯文と称されているもの

で，断面はくの字状に屈曲する。14～16は粗製土器の口縁部で内そぎ状を呈し，内側に段を有する例（16）もある。14の内外面には煤が付着している。16の口辺には無節の綾絡文が3段，単節のそれが1段施されている。17～21，24～27は粗製深鉢形土器の胴部下半の破片である。17は斜縄文のあいだに綾絡文が施されており，外面に煤が付着している。18には曲線的な条線文が，19には竹管による平行沈線が施されている。24には細い沈線が認められる。26・27は網目状撚糸文である。図版第7図28は把手を有し，細部は磨滅のため不明であるが，口縁にそって竹管工具による円形・半円形状の刺突文が施されている。

これらの土器の時期については，1～7・図版第7図28は中期前半に，8～12は中期後半に，13は後期初頭に位置すると考えられる。粗製土器にはかなりの幅があり，県内の出土例からみて条線文（18）は中期末～後期，綾絡文（16・17）は晩期，網目状撚糸文（26・27）は後期～晩期に属するものであろう。（千葉英一）



第9図 出　土　遺　物（縄文土器）

(2) 須恵器（第10図，図版第8図）

須恵器は約70片の出土をみたが，遺構に伴なったものはなく，層位により区分することもできなかった。個体数を推定すると，坏20，蓋3，壺3，甕（壺）27，瑞1，横瓶1になる。ま

た時代相により２群に大別できると考える。第10図に図化した資料により，形態と製作手法の特徴についての観察結果を報告する。文中では回転によるナデをヨコナデとし，ロクロの静止状態でナデたと思われるものをナデと表現した。ただし，ヘラキリ・ヘラケズリはどちらも回転によるものを指す。

Ⅰ群（第10図10・14）

坏　10は口径９㎝，器高4.5㎝で，マキアゲとミズビキにより成形されている。内外面はヨコナデ調整されているが，底部外面はヘラケズリのままで，受部にもヘラケズリ痕がある。立ち上り部はオリコミで，受部と一条の沈線で区画され，内側には体部との継ぎ目が残っている。形状は外反気味で，約14度内傾している。先端は丸い。他に類似の器形の資料が１個体ある。

瑞　14は直径12㎝，高さ7.5㎝，口頸基部径4.1㎝の瑞体部である。外面はヘラケズリ後にヨコナデされ，注口と文様が加えられている。底部は小さな段をなして盛りあがり，網目状の圧痕がある。内面は中央部だけがヨコナデ，他はナデ調整である。口頸部はハリツケで，ヘラの圧痕が残る。最大径の位置が推定高の3/5の高さにあるので，〝肩の張る器形〟に近いと思われる。

Ⅱ群（第10図１～９，11～13，15）

坏　平底のもの（１・２）をＡ，高台付埦形のもの（３～８）をＢに区別した。

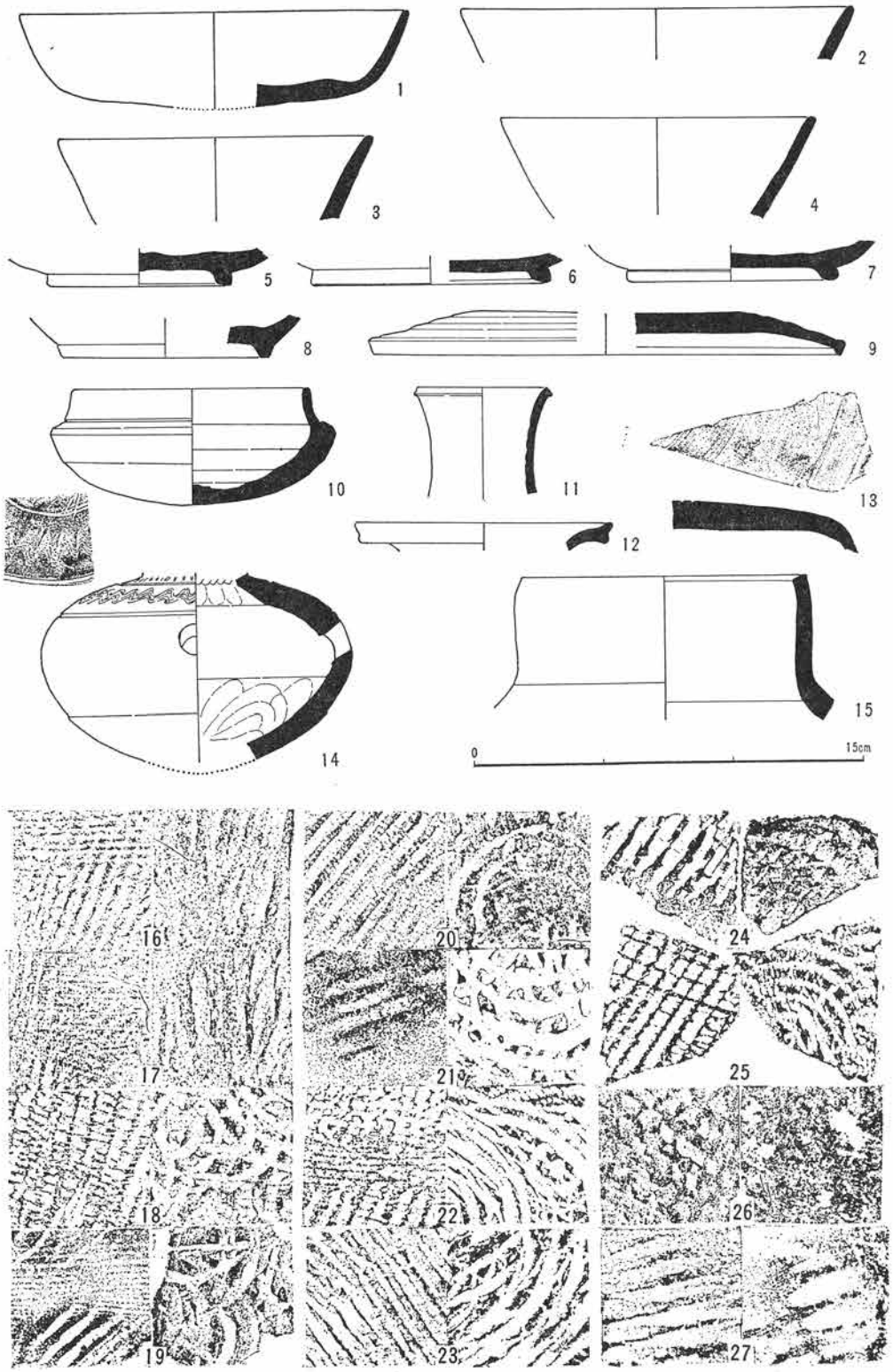
Ａ　１は口径15㎝，高さ3.7㎝で，マキアゲ・ミズビキ・ヨコナデにより作られ，底部はヘラキリ後にヘラケズリされている。類似の資料は合計７個体が出土している。

Ｂ　３・４は12㎝強の口径をもつ。断面の状態からＡより深い器形と推定した。５～８の底部はヘラケズリである。付高台は全面にヨコナデが加えられ，５と７は高台の内側と底の一部が同時になでられている。

蓋　９は天井の平坦面がヘラケズリ，傾斜面がヨコナデ調整である。内面は平坦面がナデ，傾斜面がヨコナデである。13は全面ヨコナデで，天井部に２条，肩に１条の沈線が施されている。外面は紫灰色，内面は黄灰色を呈し，なめらかな仕上げである。肩の直径は20㎝以上で，薬壺の蓋と推定されるが，時代の降るものかも知れない。

壺　11・12は長頸壺であろう。黒灰色を呈し，11の内面にはマキアゲ痕が残る。15は短頸壺で，口頸部が直立し，先端は内傾して削られている。口頸と肩の角度は135度である。

甕（壺）の叩目　甕の器面の叩目は，基本的には，外面の格子状叩目と内面の同心円叩目の組み合せと認められるが，特徴的なものを例示する。16～20は外面が格子状叩目＋クシ目，内面が平行叩目と同心円叩目の半スリケシである。21は外面の格子状叩目が半スリケシになっている。22と25の同心円叩目には木目が浮き出ている。また25の外面の叩目には木目とそれに平行な刻み目が認められる。26・27は土師色の硬質の土器である。26は外が格子状叩目，内がスリケシ，27は両面ともに平行叩目であるが，内面は半スリケシと認められる。（家田順一郎）



第10図　出　土　遺　物（須恵器）

(3) 土師器（第11図～第15図，図版第９図・10図）

土師器の大半は破損した状況で検出され，器形全体を推定し得るものは少なく，全体の器形を推定するには難点が多い。挿図の土器類は口縁部片をもとに復元実測をしたものが多く，肩部以下が不明なものが多い。また，個々の土器分類でも限界を有するものと考えられる。器形から埦形土器・高坏形土器・壺形土器・甕形土器等に分けられ，その量は甕形土器・高坏形土器が多く・埦形土器・壺形土器は極端に少ない。胎土には細砂粒や砂礫粒が混入され，色調も橙褐色から黒褐色まで種々のものがある。器面は比較的荒れているものが多いため器面整形・調整については不明なものもある。

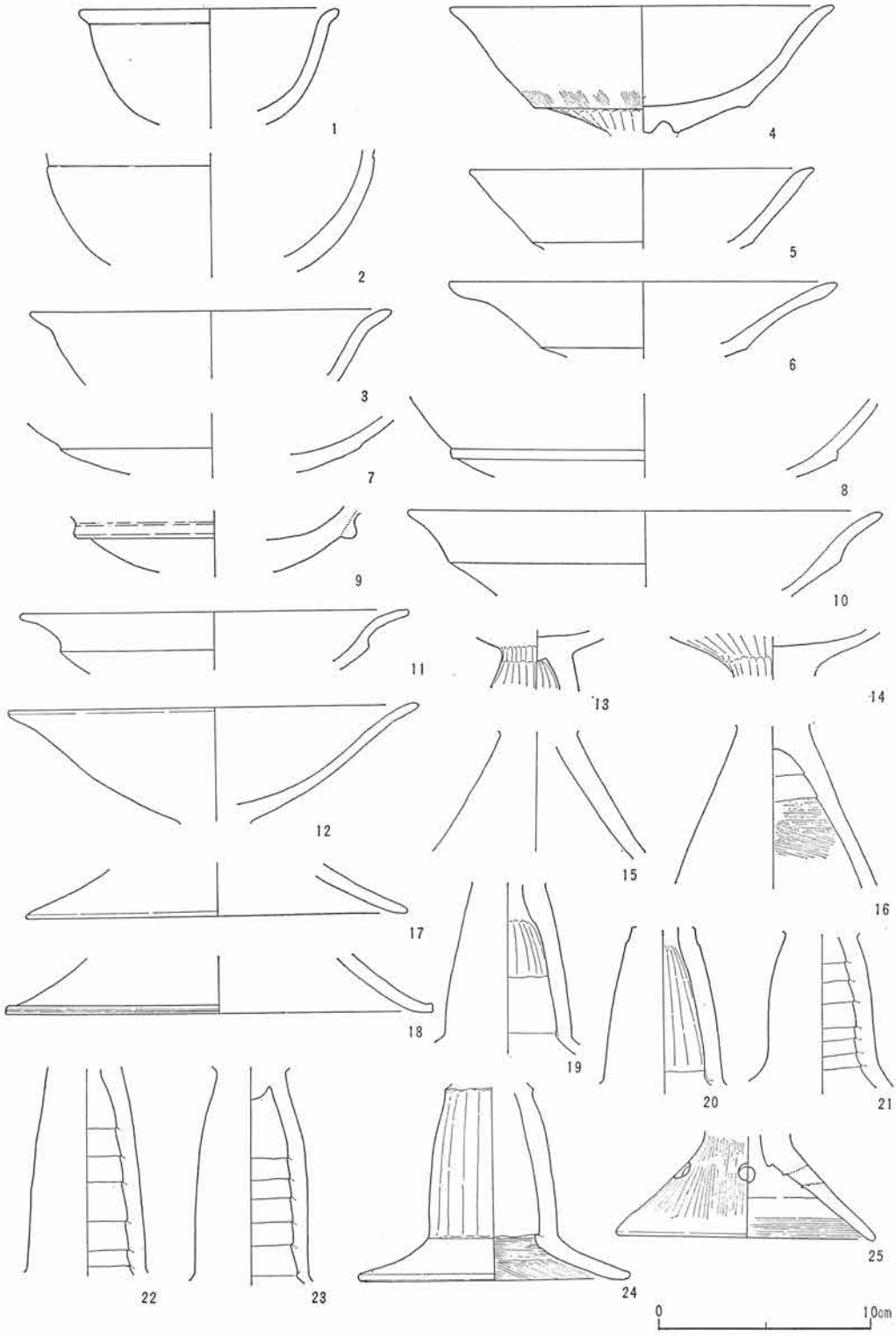
埦形土器（第11図１・２，図版第９図１・２）　埦は本遺跡の発掘資料中２点しか出土しなかった。器形は丸底を呈するが口縁部の形態から２種に大別できる。１は内彎する体部に緩かに外反する短かい口縁部を付したもので，内面には緩い稜が認められる。外面の頸部にはくびれを明確にするために棒状工具で浅い沈線が引かれている。内外面ともにヘラで研磨されて光沢を有している。胎土には精選されたものが用いられ，焼成は堅緻である。２は１に比して大形のもので，内彎する体部にほぼ直立する口縁部が付されるものと考えられる。体部上半には緩かな段があり，横ナデされている。体部の上半は横方向のヘラ研磨が，下半は斜方向のヘラ研磨となっている。胎土には細砂が混入されて暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。

高坏形土器（第11図３～24，図版第９図３～22・図版第10図１・２）　高坏は甕と共に多く出土した器形であるが，完形品は少なく，必ずしも坏部と脚部の組み合せが明確に把握できないものもある。ここでは，坏部と脚部に分けて記述してゆくことにする。

坏部Ａ類（３～５）　口縁部が大きく開いて外反し，坏底部との境に鋭い段をつくる一群で，坏内部の底面は平らになっている。製作技法としては，盤状の坏底部をつくり，口縁部をのせる接合面に刻目を施して接合したものである。４は口径18*cm*を計り，接合部の外面から粘土紐をはって補強し，内面は水漉粘土で接合面をおおっている。脚部に接合するようにホゾが付され，製作技法の一段階を示している。内外面ヘラで研磨されているが，実測図にも示した様に，段の上方には１単位15～18条の刷毛目痕がみられる。これは研磨の前段で付されたもので部分的にしか認められない。胎土には細砂が混入されて赤褐色を呈し，焼成は堅緻である。

坏部Ｂ類（７）　坏部Ａ類でみられたような鋭い段はなく，坏底部内面のカーブも緩かで，口縁部の立ち上りも内彎気味にゆるく立ち上っている。製作技法もＡ類とは異なり，接合部には粘土紐をはってはいない。内外面ともに器面が剝離しているため器面調整は不詳である。

坏部Ｃ類（８・９）　坏部底面と口縁部の接合面に幅広の段があるもので，口縁部が内彎気味に立ち上り，坏底部内面は緩かなカーブを描いている。８は，ヘラ状工具で削り取ったものと考えられるが，器面全体が荒れているために定でない。粗い砂粒が胎土に混入され，暗褐色を



第11図 出　土　遺　物（土師器）

呈している。9は凸帯が付されたもので，凸帯部は横ナデが，体部はヘラで研磨されている。胎土は緻密で暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。なお，本土器のように凸帯が体部につくものは，古式土師器と呼称されている前期の土師器の台付長頸壺形土器にあって，この種のものかとも考えられる。

坏部D類（6・10・11）　口縁部が大きくくびれて外反するもので，口縁部の段は比較的鋭い。口縁部の段には粘土が張りつけられ，基本的にはA～C類の製作技法と同じである。10の口縁部は横ナデ，体部はヘラで研磨されている。胎土は緻密で暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。11は口縁部及び体部はヘラで研磨されているが，内面はヘラ状工具で削り取られている。

坏部E類（12）　口径19cmを計り，中間に段を有さないもので，体部から緩かな曲線を描いて外反する坏部である。胎土には粗い砂粒が混入され，暗灰色を呈している。焼成が軟弱なため，器面は磨滅している。

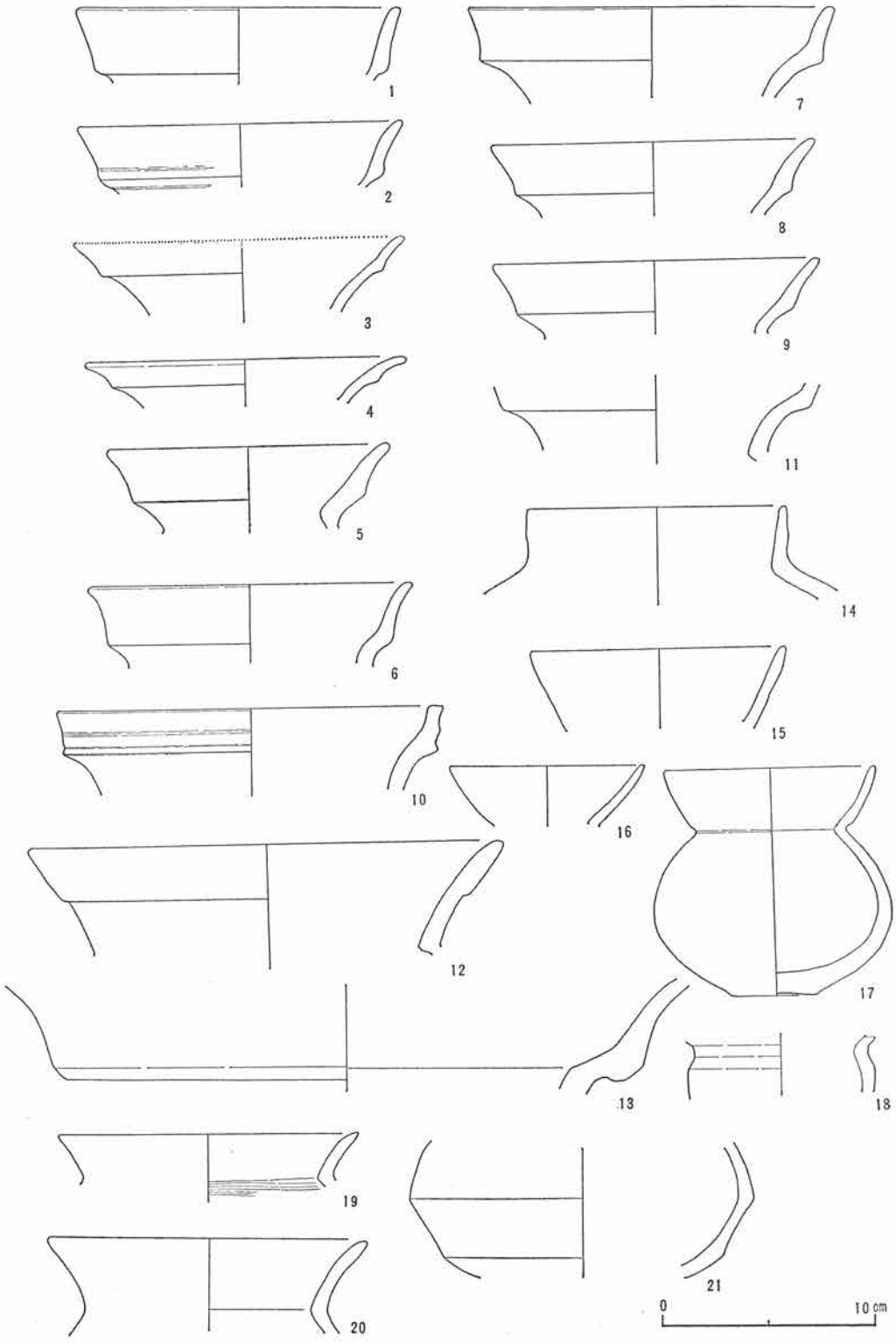
脚部A類（15～18）　脚部の開きが漏斗状を呈して，開脚度が著しいものである。器面はヘラで縦に研磨されている。16の内面には刷毛目が施されている。17・18は裾部で18の裾端部には段がつき，横ナデされている。胎土には細砂粒が混入され，暗褐色を呈しているものが多い。

脚部B類（13・19～24）　脚部が筒状を呈し，裾の部分が大きく外方に開く形態で，和泉期[註1]の高坏に共通する特徴を持っている一群である。筒部の内面は13・19・20のようにヘラ削りをしたもの，21～23のように輪積痕をそのまま残すものとがある。外面はヘラによる縦位の整形が行なわれているものもある。19・20・24は脚部の受台としての裾の接合関係を示したもので，接合部に粘土の盛り上った段を有している。胎土・焼成等は脚部A類と大差がない。

脚部C類（25）　脚部の開きは脚部A類と同様に漏斗状に開くが，脚裾部に円形の孔が穿たれ，全体的に裾の高さが高いものである。外面には細かい刷毛目文が，内面の裾部は横ナデされている。恐らく棒状脚のつく高坏であろう。

坏部A類・坏部B類と脚部B類の接合は図版第9図10～12に示した坏底部の状態から推考すると，小林行雄・佐原　真[註2]両氏の説かれる組み合せ成形手法の「脚台部をつくりその乾燥が進んだ段階で，坏部を上につぎたす方法」に属するもので，脚部内面の上端には流入した粘土の突起ができている。更に坏部A類の4と脚部B類の24をの接合部を見れば一目瞭然であろう。また，この組み合せの高坏は，組み合せ成形手法の4段階[註3]の組み合せで製作されたもので，脚部・脚部受け台部（裾部）・坏底部・坏上半部の順に成形組み合[註4]されたものと考えられる。なお，高坏類では，朱などを塗ったものは一点も検出されていない。

壺形土器（第12図1～21，図版第10図3・6～10）　口縁部の形態から複合口縁状を呈するものと単純口縁を呈するものに大別される。前者をA類，後者をB類とする。胎土には細砂粒や粗砂粒が混入され，灰褐色・暗褐色・赤褐色・澄褐色などを呈し，焼成は堅緻なものとやや軟質なものとがある。



第12図　出　土　遺　物（土師器）

A_1類（1・2・12・13）　口縁が大きく漏斗状に外反するもので，頸部との境に顕著な折返しの段をもっている。頸部は1が直立して筒状を呈すものと思われるが，2・12・13は緩かに立ち上っている。1・2の口縁は横ナデの後にヘラで研磨され，2の口縁部外面には朱が塗られている。13は推定口径約33cmを測る大形品であるが，12とともに器面が剝離しているため調整等は不明である。12・13の胎土には粗砂が混入されているが焼成は比較的堅緻である。

A_2類（3～9.11）　頸部が「く」の字状に折曲し，口縁が急に外反ないしは外方に開く一群で，口縁の下半に粘土を貼り付けて段を作り出したものである。3・4は折曲が特に著しく，口縁帯の幅も他のものと比較して狭い。内面にゆるい段を形成する（3・6・7）ものと形成しない（4・9）ものとがある。5・8・9を除いた土器は器面が剝離しているため調整等は不明であるが，胎土は精選されたものが使われ，焼成も堅緻である。5・9は内外面ともにヘラで研磨されている。8は口縁の外面はヘラで研磨されているが，口縁の内面と頸部は横ナデである。

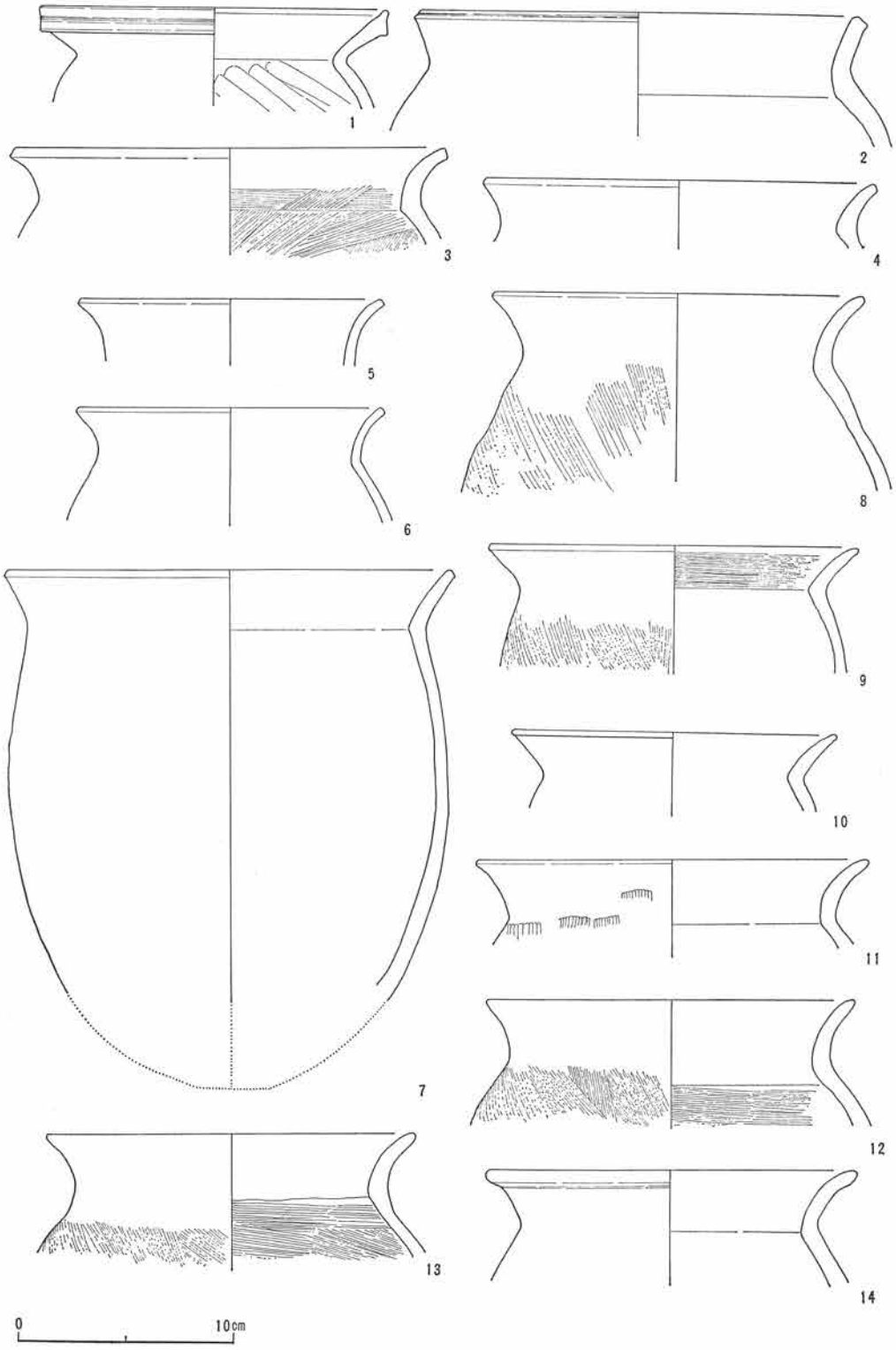
A_3類（10）　口径約18cm，土器の厚さは1cmを測り，口縁部はほぼ垂直に直立し，屈折部分の外側はかなり強い段を有して頸部に至っている。口縁の有段の部分には接合面が見られ，おそらく接合の際に上木から強く圧をかけて接合した結果，顕著な段がつくり出されたものと考えられる。内外面ともに横ナデで，胎土には細砂が混入され，暗褐色を呈している。本土器に近似したものが石川県の加賀片山津玉造遺跡第49号住居址(註4)，新潟県糸魚川市田伏玉作遺跡(註5)から出土している。

B_1類（14）　直立する口縁を持ち，口縁部の外面はヘラで縦位に，内面もヘラで研磨されている。胴部上半は横ナデで，胴部は球形に近いものになるものであろう。

B_2類（15～18）　17が本類の基本形態を示すものと考えられ，口径9.8cm，高さ10.2cm，底径3.8cmを測る。口縁は内彎気味に立ち上り，頸部で胴部と接合されている。底部は揚底風の平底で，ヘラで整形されている。外面は剝離している所が多いが，頸部と胴部との接合部はヘラでていねいに研磨されている。18は頸部から胴部上半にかけての破片で，小形の土器となるものであろう。胴部上半はヘラで研磨され，光沢を有している。胎土には緻密なものが用いられ，暗褐色を呈している。焼成は比較的堅緻である。

B_3類（19・20）　頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁が直線的に外向する一群であるが，壺形土器とするには多少疑問のあるものである。口縁部は横ナデ調整され，19の内面には刷毛目が施されている。胎土には粗砂が混入されて暗褐色を呈し，焼成は軟質である。

21は壺形土器とするには破片のため危険性がある土器片である。体部下半はヘラで削られ，顕著な段を有している。外面はていねいにヘラで研磨されて光沢を有している。胎土には細砂が混入され，澄褐色を呈している。第15図5は胴部の破片で，壺形土器の肩部であろう。器面には鋭い工具で上方から下方へ引いた沈線が見られる。暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。



第13図　出　土　遺　物（土師器）

甕形土器（第13図・14図，図版第10図4.5.11～27）　甕形土器は口縁部の形態から3種に大別され，複合口縁状を呈するものをA類，外削ぎ状を呈するものをB類，単純口縁を呈するものをC類とする。なお，B，C類は更にその特徴から細分される。甕形土器の整形は全体的に口縁部の内外面が横ナデで，胴部が斜位の櫛目または刷毛目によって整形されたものが多い。本遺跡から出土した甕形土器には完成品が少なく，胴部形態の不明なものが多い。

A類（第13図1）　頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁部は粘土の貼りつけによって複合口縁状を呈している。整形上内面に凹帯が生じた結果，口唇の先端が上に向って立ち上っている。口縁帯は内外面横ナデされ，胴部の内面はヘラで削られている。口縁部から頸部にかけてススが付着している。胎土には細砂が混入され，暗褐色を呈し，焼成は堅緻である。

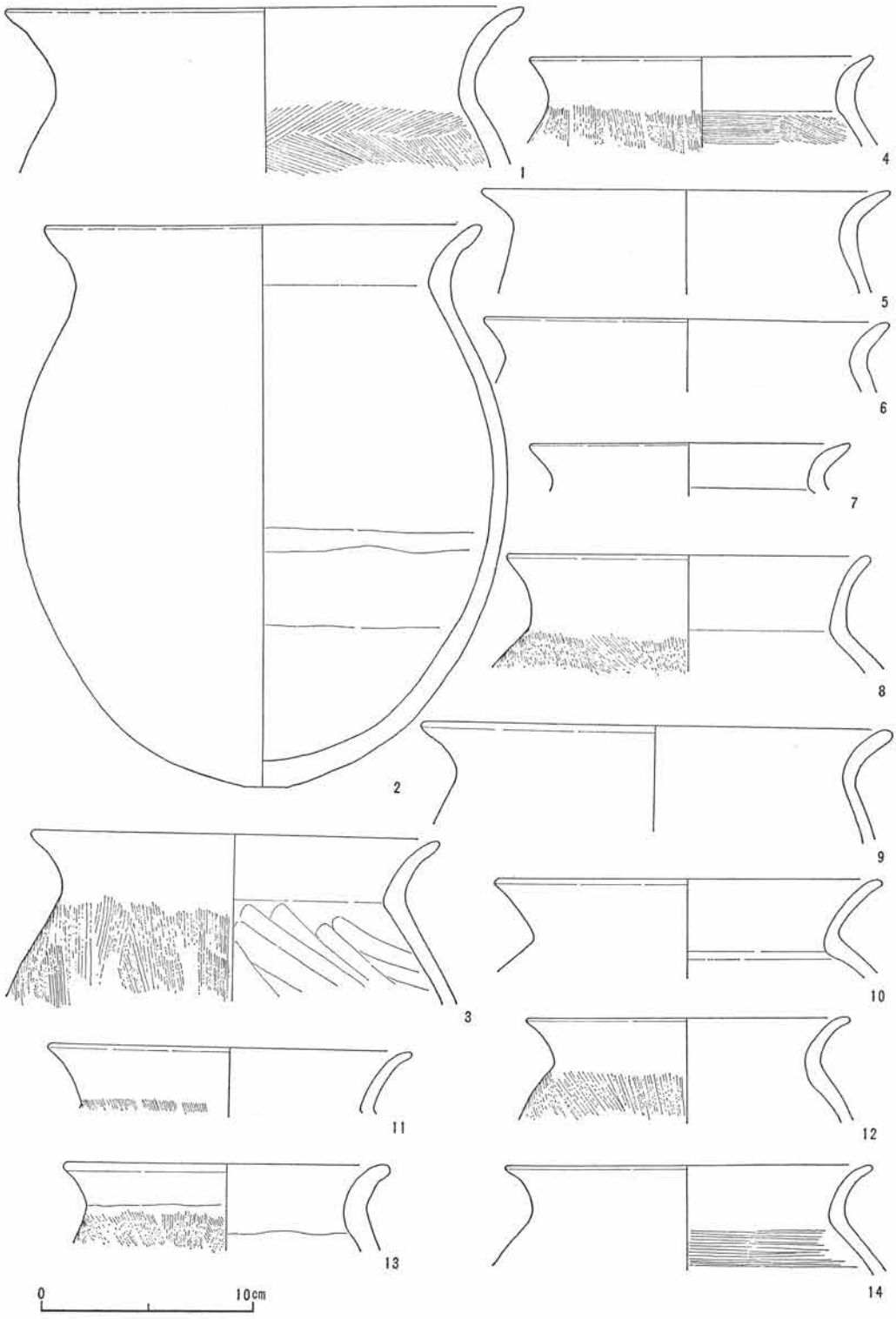
B_1類（第13図2・7）　頸部からの口縁部の立ち上りが比較的緩かで，口縁部が外向する一群である。口唇部外面の端部は鋭い稜を有している。この稜はヘラで削る際に外方から圧が加えられた結果生じたものと考えられる。この胴部内面はヘラで削られている。7は口径20.5cm，推定器高約23.7cmを測り，口径と胴部最大幅が大略同じ土器である。口縁部は内外面ともに横ナデで，頸部から胴部下半にかけてはヘラ調整されている。口縁部から胴部下半にかけてはススが付着している。

B_2類（第13図3～6・8）　頸部が「く」の字状に屈曲し，口縁が外反する一群で，口唇部外面にはB_1類のような鋭い稜は存在しない。3の内面には斜位の櫛目が施されている。5・6は他の土器に比して，器厚は薄手の小形土器である。口縁部は内外面ともに横ナデであるが，胴部は磨滅しているため定でない。胎土には粗砂が混入され，赤褐色を呈し，焼成はやや軟質である。8は最大幅が胴部中程にくるものと考えられ，胴部外面には幅2.1cmの櫛状工具で斜位の櫛目が施されている。口縁部にはススが付着している。

C_1類（第13図9・10）　頸部は強く屈曲し，口縁が直線的に外向する一群で，口唇部の先端が一段と細くなって丸まっている。9の口縁部内面には横位の櫛目が，胴部には口縁部内面より粗い櫛目が斜位に施されている。10の口縁部内外面は横ナデである。

C_2類（第13図11～13）　頸部が直立気味に立ち上り，口縁が緩かに外反する一群で，口唇部がC_1類に比して厚く，丸味を持っている。口縁部の内外面は横ナデで，胴部には斜位の櫛目が施されている。11の口縁部に櫛目が付されている様に図示してあるが，これは横ナデ以前のものである。胎土には粗砂が混入され，焼成は比較的堅緻である。

C_3類（第13図14～第14図3）　頸部が緩かに屈曲するものと14のように「く」の字状を呈して屈曲するものとがあるが，口縁の先端が口縁外側に肥厚し，一見，先端部を折り返した様な形状を呈する一群である。2は口径20.3cm，器高26.6cm，底径2.1cmを計る完形土器で，口縁部から頸部にかけて横ナデ，頸部から胴部下半（底部から上へ1.5cm）まで縦位のヘラで整形されている。胴部内面はヘラ調整されている。底部は小形の平底で底面はヘラで整形されている。胎土



第14図 出　土　遺　物（土師器）

には粗砂が混入され，赤褐色を呈している。口縁から胴部下半にかけてススが付着している。3は胴部外面が刷毛目，内面がヘラで調整されている。

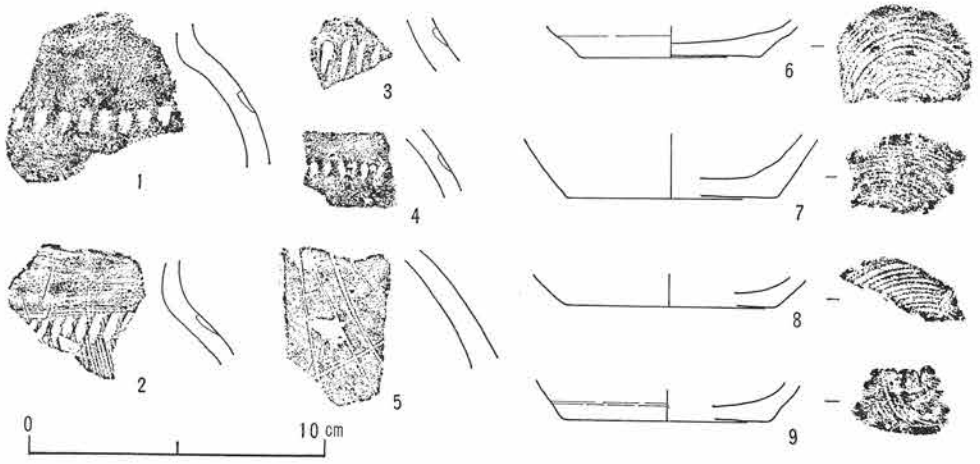
C_4類（第14図4～7）　口縁帯が狭く，逆「L」字形に外反する土器で，頸部からやや緩かなカーブをもって胴部に至るもので，長胴の甕形となるものであろう。関東地方では(註6)頸部に段を有し，器面の整形は縦位のヘラ削り手法が一般的にもちいられる。

C_5類（第14図8～10）　口縁部が徐々に厚くなり，口唇部で最高になって丸まる一群である。頸部からの立ち上りは8のように直立気味に外反するものと，9のように緩かに屈曲して外反するもの，10のように「く」の字状に強く外反するものがある。9は最大径を口縁に有し，C_4類に近いものとも考えられる。9の胴部には，刷毛目が縦位に施されているが，磨滅しているため，その痕跡は一部分にしか見られない。3点とも口縁部から頸部及び胴部上半にかけてススが付着している。

C_6類（第14図11～14）　頸部が緩かに屈曲し，口縁が外反気味に立ち上り，口唇部から1*cm*位の所で，折れ曲って外向する一群である。13は全体的に器肉は厚く約1.1*cm*を計る。口縁部の内外面は横ナデで，胴部外面には斜位の櫛目ないしは刷毛目を施したものが多い。いずれも口縁部から胴部上半にはススが付着している。

第15図1～5は甕ないしは壺形土器の胴部破片で，胴部上半にヘラで刺突したものである。いずれも下方から上方へ突き上げたもので，工具の太さによってその形も異なっている。2は頸部下半に施されたもので，櫛歯状工具で胴部整形がなされた後に刺突が加えられている。この種の遺物は，図示したものが全てで，出土した遺物量からの割合は極めて少ない。この刺突文は弥生後期の小松式や竹ノ花式土器に見られる一手法で，その下限は古墳時代の前半（月影期）までである。

第15図6～9は前述してきた土器群とは，時代を異にするものと考えられる。須恵器のⅡ群



第15図　出　土　遺　物（土師器）

土器に伴出する土師器の坏である。底部は回転糸切で，２次的な調整は全く加えられてはいない。体部は横ナデされ，８は内外面ともにヘラで研磨されている。９の内面には黒色の付着物がついている。なお，７は底部からの立ち上りが鋭く，器厚も厚いところから壺ないしは甕形土器かとも考えられる。胎土には細砂が混入され，赤褐色や淡褐色を呈しているが，焼成は全体的に堅緻である。

（戸根与八郎）

註1. 神林淳雄他「武蔵和泉遺跡調査概報」考古学第11巻第５号　昭和15年

2. 小林行雄他『紫雲出一香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』詫間町文化財保護委員会　昭和39年

3. 註２に同じ
笹沢　浩「信濃における鬼高式土器の開始」信濃第20巻第３号　昭和43年

4. 大場磐雄他『加賀片山津玉造遺跡の研究』加賀市教育委員会　昭和38年

5. 関　雅之「田伏玉作遺跡」糸魚川市教育委員会　昭和47年

6. 『八王子中田遺跡一資料編Ⅲ一』八王子市中田遺跡調査会　昭和43年

表1. ピット計測値

ピット番号	長径	短径	深度	備考	ピット番号	長径	短径	深度	備考
1	22	22	− 6.5		14	26	26	− 7.5	
2	56	46	−59	二重ピット・土師器(6)	15	44	42	−50	土師器(25)
3	36	22	−11.5	土師器(14)	16	20	18	−12.5	
4	80	58	−38.5	土師器(32)	17	16	12	−19.5	
5	84	72	−26	方形・土師器(3)	18	22	?	−12.5	半分完掘
6	28	22	−19		19	32	24	−15	
7	54	46	− 8.5		20	28	26	−15.5	土師器(7)
8	26	22	−14		21	32	24	−10.5	土師器(23)
9	16	14	−15		22	28	22	−12	
10	14	14	−17	土師器(4)	23	22	20	−11	
11	36	36	−47	半欠・土師器(10)	24	26	20	− 7	
12	88	78	−26.5		25	28	26	−13.5	
13	84	44	−15	三角形・土師器(8)	26	24	22	−16	土師器(4)

註（　）内の数字は土師器の破片数を示す。単位は*cm*。

Ⅴ 総　　括

1. 土器について

本遺跡の発掘調査で出土した遺物は，土師器が主体で，縄文土器と須恵器が若干混入している。ここでは本遺跡の主体をなす土師器とそれに伴う須恵器について考えて見たい。

(1) 須恵器の型式と編年

Ⅰ群土器について古墳時代の須恵器について，豊富な資料と精密な分析を提供したのは，陶邑古窯址群[註1]の調査であるが，その報告を参照しても，第10図10の坏のような例は見当らない。すなわち，形態としては，小形で器高が口径の1/2に達する丸みのある形，器高の1/4の高さをもつ退化していないタチアガリに，陶邑Ⅰ型式の特徴をみるが，鈍く丸みのあるタチアガリの特徴はⅡ型式のものであろう。さらにヘラケズリした下り気味の受部と沈線による区画は類例をみない。強いて類例を求めるなら，堺市深田遺跡[註2]出土の壺をあげることができる。県下では糸魚川市田伏遺跡[註3]，十日町市馬場上遺跡[註4]に陶邑Ⅰ・Ⅱ型式の蓋坏の報告例があるにすぎない。

第10図14の碗は体部の直径の位置が上に偏り，口頸基部が直径の1/3と細く，注口の径は1.2*cm*で最小の部類に入る。いずれも陶邑Ⅰ型式の特徴であろう。南魚沼郡六日町飯綱山古墳群[註5]にも出土例がある。

Ⅱ群土器について　蓋坏・壺・甕・横瓶という組合せは，すでに県内の報告例も多く，8～10世紀の年代が与えられている。坏Aには，ほぼ同じサイズの出土例[註6]が2例見出される。坏Bの高台は，接地面が水平ないし外に偏り，底部の縁に付けられるもので，陶邑の編年ではⅣ型式の終り，すなわち糸切底の現われる直前の様相を示すと思われる。甕の叩目については，編年基準となり得る報告例がなく，二次調整の有無が多少問題になるが，ここでも単に例示するに止めざるを得ない。ただ木目のある同心円叩目は，県外の報告例をみないが，県内には2例[註7]が認められる。当て道具の材質の問題と一つの地方色を示している。　　(家田順一郎)

註1. 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園　昭和41年
『陶邑Ⅰ』・『陶邑Ⅱ』大阪府教育委員会　昭和51年—昭和52年

2. 『陶邑・深田』大阪教育委員会　昭和48年，PL 13—9の形が似ているが，これは内面のカーブが明らかに〝閉じた器形〟を示している。陶邑Ⅰ型式

3. 関　雅之『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会　昭和47年

4. 『馬場上遺跡—第1次・第2次発掘調査概報—』(十日町市文化財調査報告7) 十日町市教育委員会　昭和50年　p.18

5. 金子拓男・佐藤泰治他「伊乎乃郡の古墳」(『南魚沼』新潟県文化財調査年報第15)　新潟県教育委員会　昭和52年　p.431

6. 本間信昭・家田順一郎『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—茶院遺跡—』(新潟県埋蔵

文化財調査報告書第５）新潟県教育委員会　昭和51年
本間信昭・家田順一郎・駒形敏朗『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―内町遺跡調査報告―』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第３）新潟県教育委員会　昭和49年

7. 本間嘉晴・関　雅之・本間信昭『浜田遺跡』真野町教育委員会　昭和50年　第16図―８
本間信昭・家田順一郎『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―茶院遺跡―』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第５）新潟県教育委員会　昭和51年　第９図―２・19

(2)　土師器の型式と編年

新潟県の土師器の研究は，弥生式土器の下限問題を源にして出発したと言える。(註1) 古式土師器については最近着々と資料が増加し，その研究も進んでいるが，第Ⅱ様式（和泉期），第Ⅲ様式（鬼高期）の土師器については，具体的な調査例が少なく，まだ土器集成の段階にまでは至っていないのが現状である。しかし，最近になって，糸魚川市田伏玉作遺跡，(註2) 青海町大角地遺跡，(註3) 十日町市馬場上遺跡等の(註4)調査が行なわれ，第Ⅱ様式の土器を伴った住居跡が大角地遺跡，馬場上遺跡で確認されている。特に，大角地遺跡の７号住居跡は工房跡と考えられている。

本遺跡出土の土師器についてはⅣの(3)で個々について触れてきたが，県内では正式報告書例が少ないために，ある程度の様相は明らかになりつつあるが，全体としてはまだ資料不足といえる。このため，全国的な視野から本遺跡出土の土師器について見た方が妥当と考えられる。土師器の編年的研究は多くの先学によって進められ，細分化されて行く傾向にある。玉口時雄氏(註5)は土師器の変遷を第Ⅰ様式から第Ⅳ様式までの４様式に区分され，更にこれらを細分している。小出義治氏(註6)は静岡県東部の土師器編年に際して和泉式土器をⅠ・Ⅱに細分されている。大塚初重・杉原荘介氏(註7)は土師器の使用された時期として，前期・中期・後期・晩期Ⅰ・晩期Ⅱと区分し，前期は前期古墳の時期に，中期は中期古墳の時期に，後期は後期古墳の時期にそれぞれ相応し，更に，晩期Ⅰは奈良時代，晩期Ⅱは平安時代初期に相応するであろうと考えられている。このような土師器の編年的研究を踏えて本遺跡の土器を検討する必要がある。

本遺跡出土の土師器は，それぞれの特徴から，セットとして取り扱うには問題があるが，大略３時期に区分することができると考えられる。第Ⅰグループとしては高坏形土器の坏部Ｃ・Ｄ・Ｅ類，脚部Ａ・Ｃ類，壺形土器の A_2 類の３・４，B_1 類，甕形土器Ａ類，第15図１～４の胴部破片である。この種の土器の特徴的手法はヘラ磨き，ヘラ削り，凹線文・刷毛目文などであり，北陸地方においては弥生終末から古式土師器（前期古墳の時期）にかけて普遍的に見られるものである。しかし，本遺跡出土のものは，甕形土器Ａ類の口縁は横ナデで凹線文は認められず，だれたものと考えたい。壺形土器の A_2 類の３・４は大きく口縁が開くもので，緒立遺跡壺形土器Ａ類に近似したものがある。また，甕形土器の胴部上半に施される刻文は，弥生後期の小松式や竹ノ花式土器に見られる一手法で，その下限は古墳時代前期の月影期までである。本土器群は土器の組み合せには難点が多いが，古式土師器と称されている一群に属し，古墳時代前期に位置するものであろう。なお，本土器群は地域的様相の濃い汎北陸的土器といえよう

が，時間差・地域差の問題は今後の資料の増加によって検討されなければならない。

第Ⅱグループの器形の組み合せは椀形土器・高坏形土器坏部A・B類，脚部B類，壺形土器A_1類～A_3類，B_2類～B_3類，甕形土器B～C類で，甑形土器・手捏土器は検出されていない。数量的には甕形土器が一番多く，椀形土器などは全体的に少ない。椀形土器，高坏形土器は入念にヘラ磨きされたものが多く，光沢を有しているものもある。高坏形土器は4段階の組合せ成形手法によって製作された一群で，口縁部が大きく開いて外反し，坏底部の境に鋭い段をもち脚部は筒状を呈し，脚部の半ばが膨らみ裾が大きく外方に開く形態である。壺形土器は複合口縁状で外反するものと，単純口縁で内彎気味に立ち上るもの，くの字状に頸部が屈曲し，口縁が外向するものがある。複合口縁状を呈する成形手法は，古墳時代前期の手法を踏襲しているが，口縁部の段はかなりだれている。また，小形の壺形土器は平底を呈しているが，該期の後半に所属するものであろう。甕形土器は胴部がやや球形に近く，口縁は「く」の字状に外反するものとC_4類，C_5類，C_6類のように長胴を呈する形態がある。これらの特徴をもつ土器は，県内では田伏Ⅰ式土器と呼ばれ，和泉期の新しい方に位置ずけられている。[註8] なお，本グループの甕形土器C_4，C_5，C_6類土器については今後の資料の増加によって検討されるべきものと考えている。

第Ⅲグループは底部に回転糸切痕を残す坏形土器と甕ないしは壺形土器である。土師器での糸切り底の出現は，関東では真間式で見られ，国分式ではそのほとんどが糸切り底になる。[註9] 年代的には須恵器のⅡ群土器につくものと考えられ，奈良末から平安時代初期のものであろう。

以上のように本遺跡出土の土師器は，第Ⅰグループが4世紀，第Ⅱグループが5世紀，第Ⅲグループが8～9世紀として年代的位置を与えることができると考えられる。（戸根与八郎）

註1. 小出義治「佐渡に於ける後期弥生式文化の限界」国学院雑誌第56巻第2号　昭和30年
小出義治「北陸の古式土師器と二・三の問題」国学院高校紀要4　昭和37年
吉岡康暢「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル3月号　昭和42年
上原甲子郎・磯崎正彦他「越後緒立遺跡における古式土師器について」考古学雑誌第52巻第3号　昭和42年

2. 関　雅之『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会　昭和47年

3. 八幡一郎監修『大角地遺跡－1973年度発掘調査概要－』青海町教育委員会　昭和49年
関　雅之「大角地遺跡」（『寺地硬玉遺跡－第2次調査概要－』）青海町教育委員会　昭和46年
この報告の中で，和泉式併行の土師器の他に浜山型内磨砥石や山陰地方の第Ⅱ様式に近似すると思われる須恵器の無蓋高坏の坏部片が出土している。

4. 『馬場上遺跡－第1次・第2次発掘調査概報－』（十日町市文化財調査報告7）十日町市教育委員会　昭和50年
『馬場上遺跡－第3次・第4次発掘調査概報－』（十日町市文化財調査報告10）十日町市教育委員会　昭和51年

5. 玉口時雄「土師器」新版考古学講座5　昭和45年

6. 小出義治『伊東市史』　昭和38年

7. 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成本編1（前期）』　昭和46年

8. 註2に同じ
9. 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成本編4（晩期）』 昭和49年

2. ま　と　め

本遺跡は第3図に示したように，遺跡本来の面積は広く，北側には縄文時代の，南側には古墳時代の遺物包含層が残っている。今回，発掘調査を実施した面積は南側のごく限られた小面積だけである。発掘調査によって，柱穴状のピットや溝状遺構などが検出されたが，これ等の性格については発掘調査区域が狭いために追求はできなかった。しかし，検出された遺物は，混在していたものの縄文時代，古墳時代，奈良～平安時代の3時代に大別することができる。更に，これらの土器は細分される。即ち，本遺跡は時代的には分断しているが，長期に亘って同一地点に遺跡が形成されていたという事実が判明した。特に古墳時代の土師器（第Ⅱグループ）に注目すべき点である。須恵器の碗・坏との伴出状況を層位的に把握することはできなかったが，おそらく，土師器の第Ⅱグループに伴出するものと考えられる。この付近には古墳は現在の所確認されておらず，本遺跡は一般の集落とは一寸趣を異にする集落と考えられる。周辺の遺跡からの出土遺物を見ると，昭和51年度に発掘を行った横滝山遺跡では溝状遺構に伴って古墳時代前期の土器や碧玉製管玉が，また過去においてはこの横滝山遺跡と新信濃川を渡った対岸，分水町国上居下遺跡から子持勾玉が採集されている。また和島村城丘からは明治44年，島崎川の落水分水路の工事の際に蕨手刀が検出されている。これらの遺跡はすべて島崎川流域であり，本遺跡とこれらの諸遺跡とが時期的に符合するものか否は今後の課題でもある。

本遺跡での主体は和泉期（和泉Ⅱ式）と考えられ，5世紀後半～6世紀前半に年代的位置を与えることができる，また，須恵器の第Ⅱ群土器は，昭和51年度に発掘調査が行なわれた横滝山遺跡で検出された土壇状遺構に伴う瓦・須恵器とほぼ同年代と考えられ，この横滝山遺跡と有機的関連性を持っているものと考えることができよう。なお，祭祀遺物及び玉製品は検出されなかった。

今後の問題点として，住居跡の検出，土師器（第Ⅱグループ）および須恵器の碗・坏の編年と伴出関係の追求などがあるが，本遺跡はこれらの問題点を解明するに多くの考古学的素材を提供する遺跡と考えられる。

（戸根与八郎）

五分一稲場遺跡の遠景（西側から）

五分一稲場遺跡の近景（南側から）

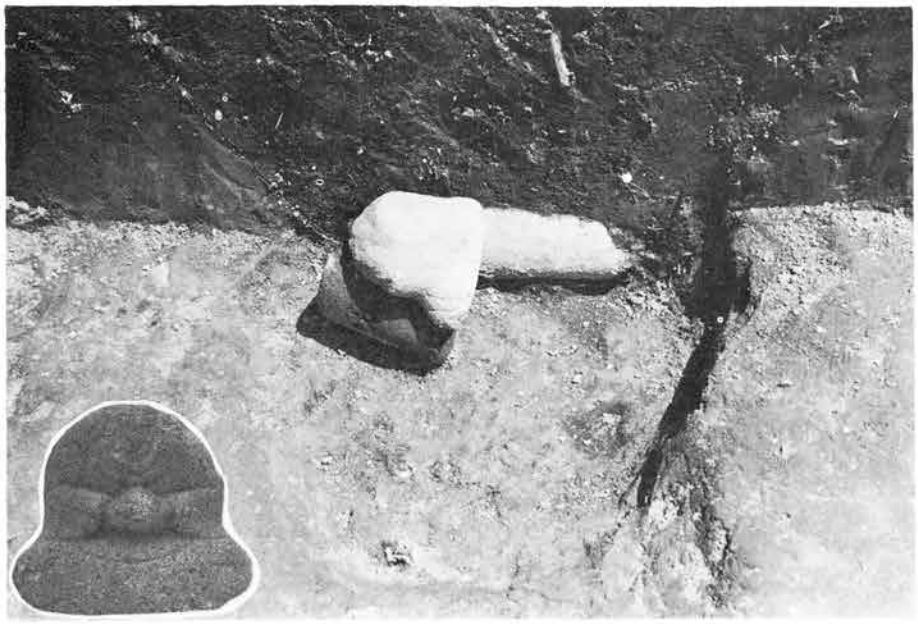
１ ～ ５ 区 遺 構 群（西側から）

１ ～ ２ 区 遺 構 群（西側から）

３号溝土器出土状態（西側から）

３号溝土器出土状態（南側から）

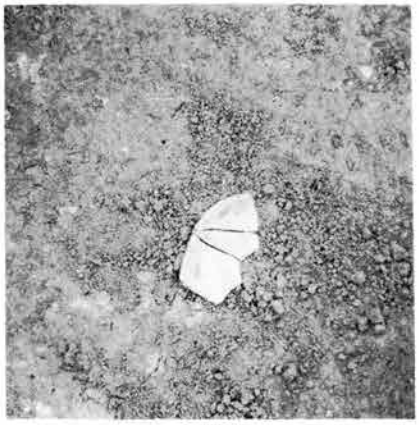
1 ～ 2 区 遺 構 群（北側から）



墳　　墓（西側から）

発　掘　風　景

1. 縄文土器（深鉢）



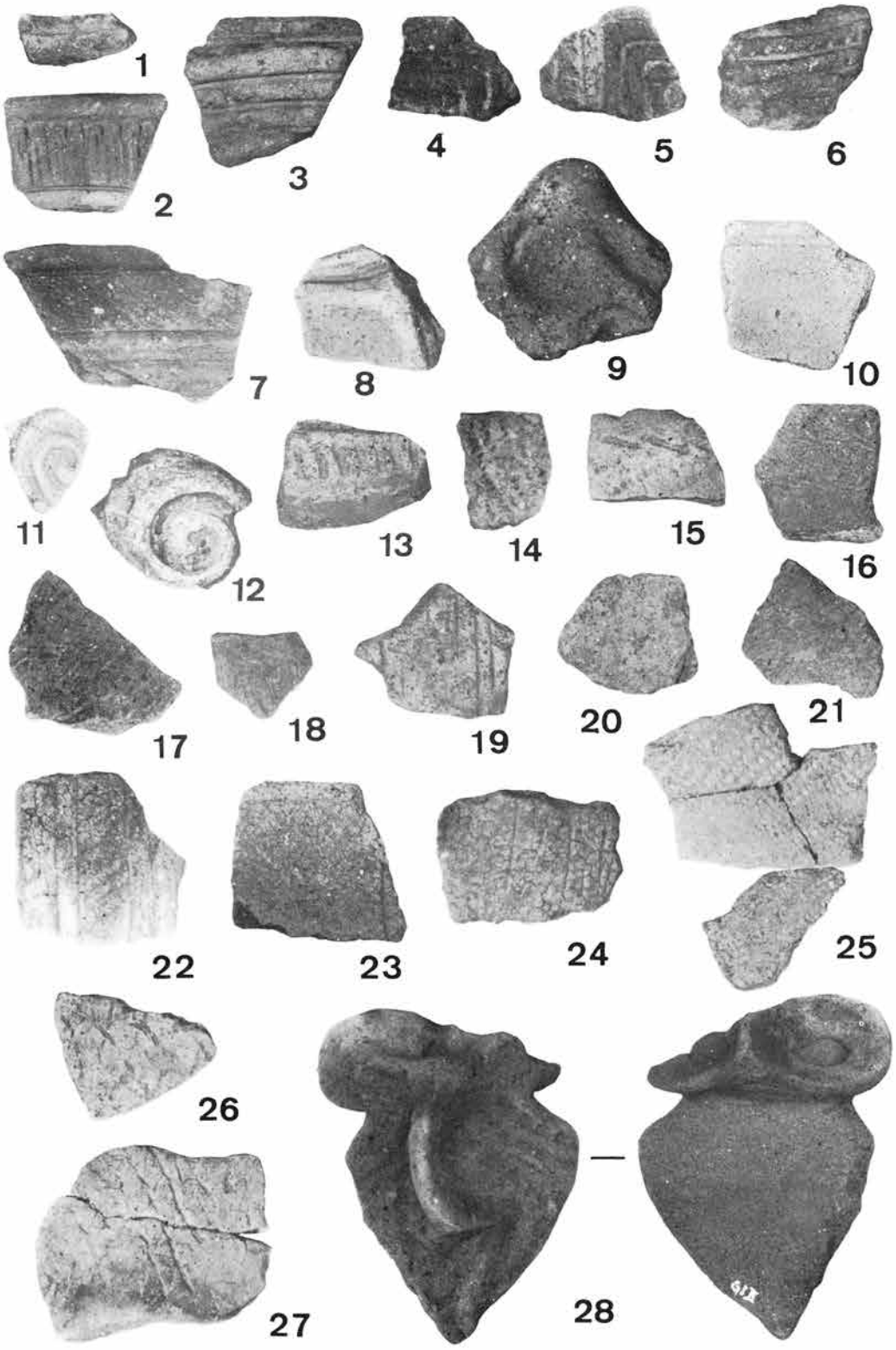
2. 土師器（坏）

3. 土師器（高坏脚部）

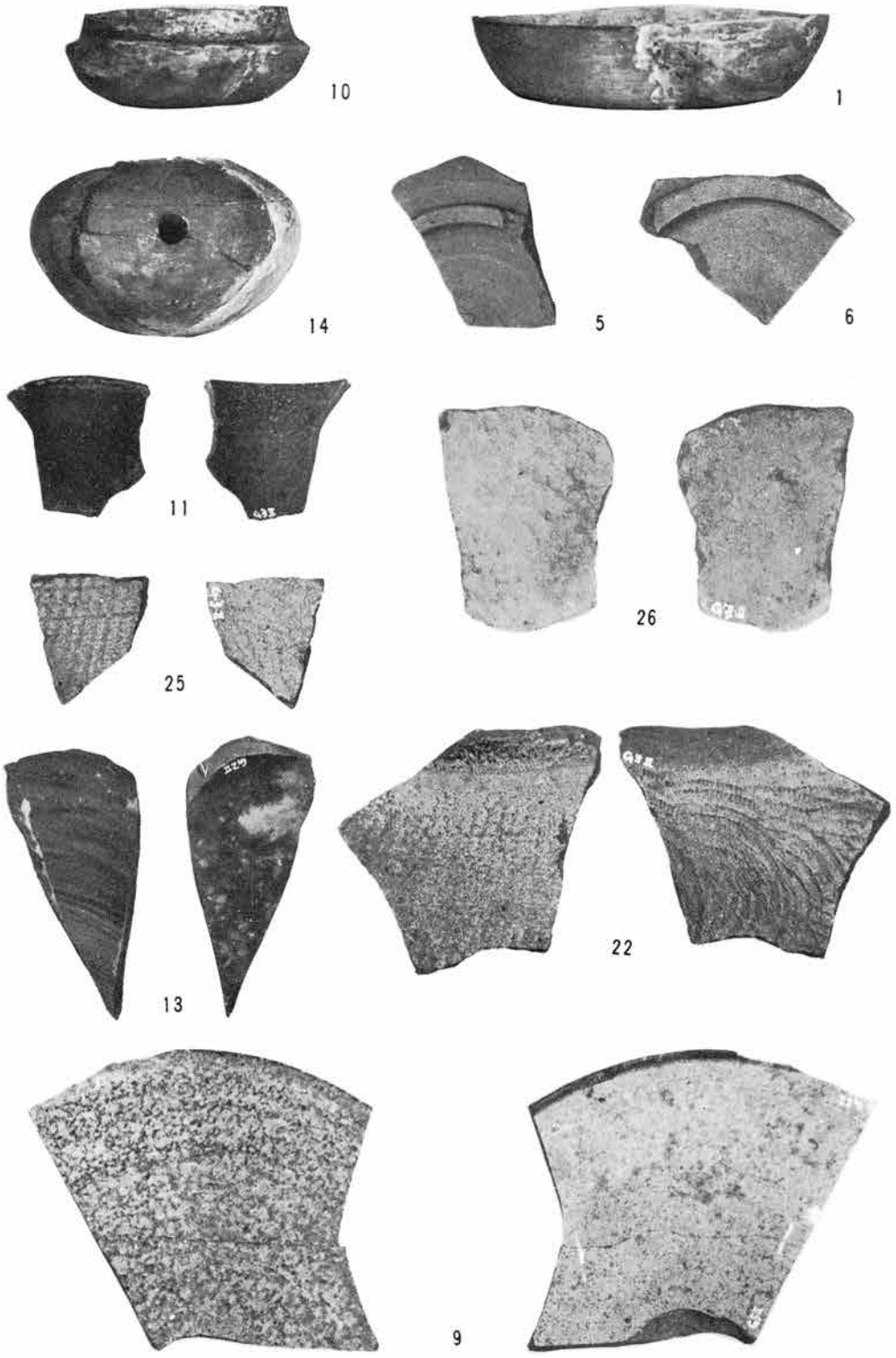
4. 須恵器（瓶）

5. 土師器（甕）

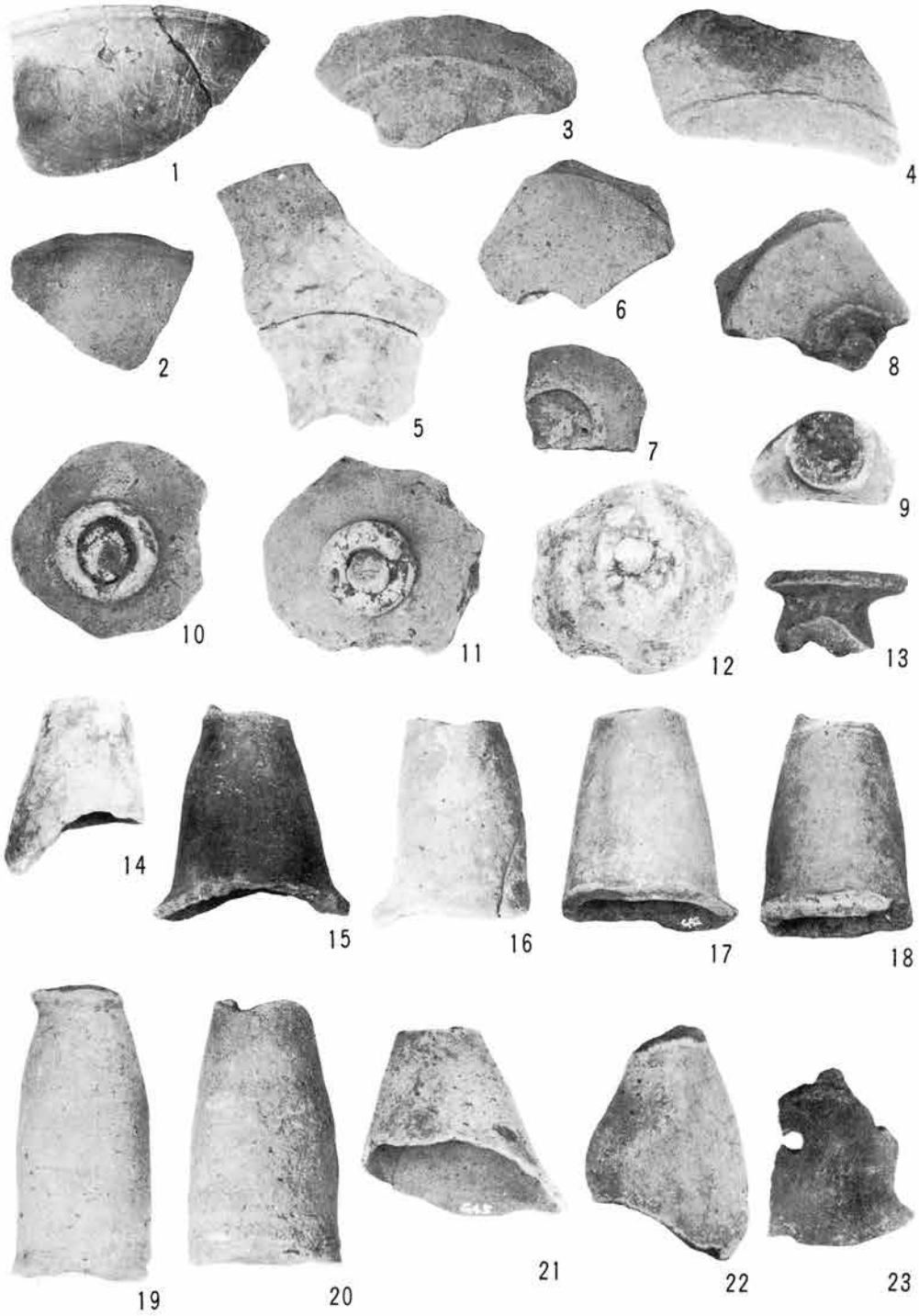
遺物出土状態



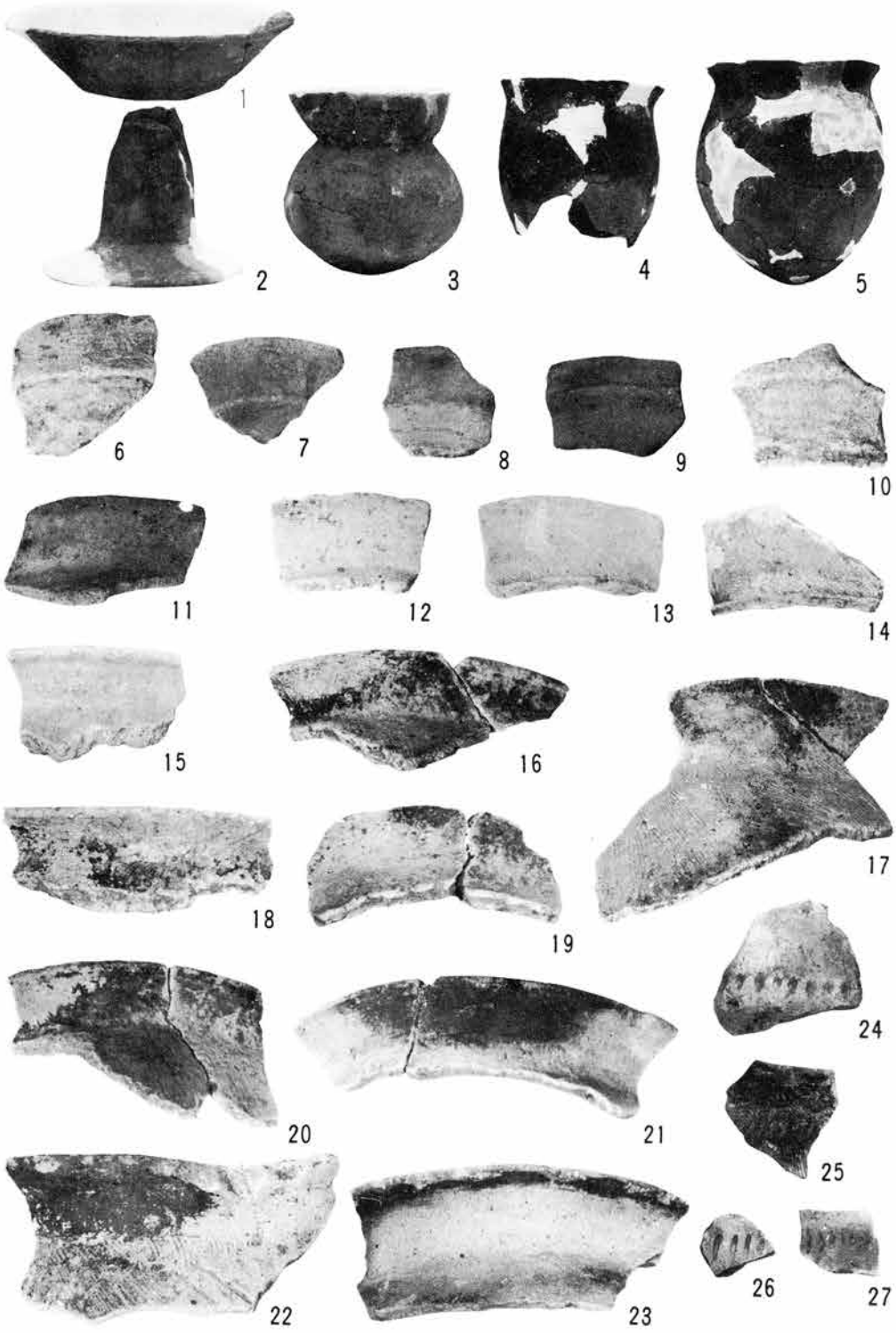
出　土　遺　物（縄文土器）



出　土　遺　物（須恵器）



出　土　遺　物（土師器）



出　土　遺　物（土師器）

新潟県埋蔵文化財調査報告書第14

国道116号線

埋蔵文化財発掘調査報告書

五分一稲場遺跡

昭和53年3月29日印刷
昭和53年3月31日発行

発行　新潟県教育委員会
印刷　北越印刷株式会社